

淨土

三 月 號



昭和十一年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十一年二月廿日印刷納本
昭和十一年三月一日發行

第二卷 第三號

!! 出に遂! 篇名

佐藤春夫著・小杉放菴挿繪並装幀

法然上人
別傳

掬水譚

文豪佐藤先生の流麗圓滑の文と畫壇の雄小杉畫伯の枯淡風雅な挿繪になる昭和に生きた法然上人傳！
宗教文藝の精髓・千載に光彩を放つ。

過般大毎東日兩紙に連載し、百萬の讀者を魅了したるもの。俗に媚びず、難に墮ちず、作者自ら淨土の信仰を摑み、一篇一篇悉く念佛の溫床に育成された宗教文學の最優なる創作。

◎著者署名の特典

特に記念の爲め、發行所（法然上人鑽仰會・大東出版社）への直接註文に限り、著者署名す。

- △限定出版 壹千部
- △定價四圓五十錢・送料廿二錢
- △七八寸特製ノート型・天金・十二ボ総振假名・約三百頁・美麗函入
- △放菴畫伯に依る……装幀、見返し、六十四葉挿繪（玻璃版）
- △兩大家一致の想になる

豪華・絢麗版

一部を備へて家寶とせられよ

法然上人鑽仰會
東京芝公園一丁目七ノ十一
大東出版社

之ぞ斷然優秀の

消炎鎮痛貼布藥

- 一、皮膚に貼つたまゝ入浴差支へなし
- 一、貼り換へず共一晝夜藥効を持続す
- 一、綺麗故不快の貼りアトを残さず
- 一、藥臭もなく悪性のかぶれも起さず
- 一、何れへ貼つても柔軟伸縮自由自在
- 一、ロートエキスを含む最新の威力



佳人の膏藥

ママプラスター

愛讀者御優待

御住所氏名明記の上大木合名會社宛御
申込下されば本誌讀者に限り見本贈呈

適應症

神經痛 肩の凝
リウマチスの痛む所
運動に因る筋肉並關節痛
勞働に因る筋肉並關節痛
打撲捻挫胸痛
手足首背腰の痛む所
乳腺炎齒痛靴擦
疳氣腫物螫傷



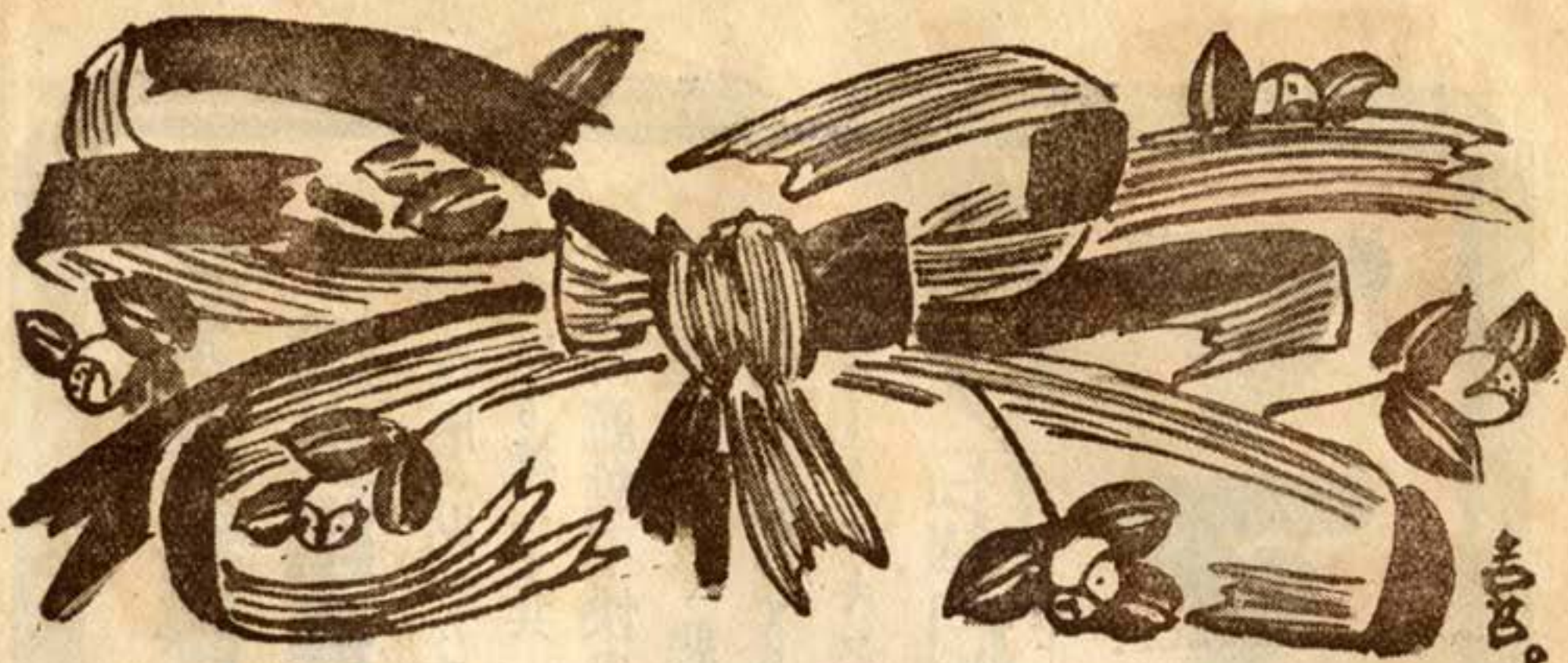
大木五臟藥本舖

大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三
電話神田代表壹壹〇五番

各藥店にあり

二十錢
五十錢
一圓



ま。

◇ 浄土 第三卷 三月號 目次 ◇

・表紙……………井上正春
・扉・目次カット……………青柳喜兵衛

三來
夜話

商賣は先祖へのつとめ……………大島徹水(三)

修養
講話

香を献げる心……………眞野正順(二)

聖人を
語る

二宮尊徳の信仰……………奥平祥一(一)

日章旗
翻へる

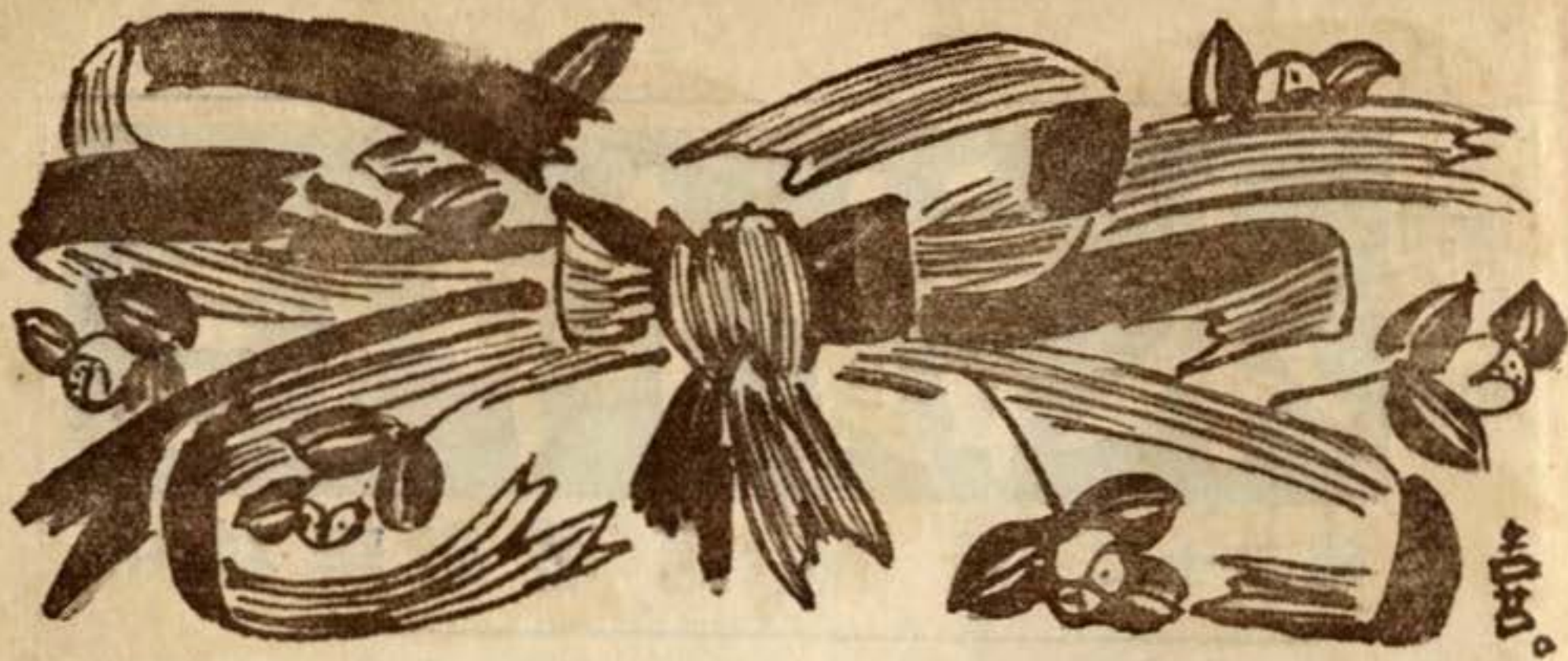
南洋を訪づれて……………江藤澂英(三)

隨筆隨想

念佛偶記……………佐藤春夫(一〇)
あれか||これか……………室伏高信(四)
雪の表情……………青柳優(九)
一寸来い!……………吉水辨道(六)

阿彌陀
經講義

開かれ行く人格の光……………中村辨康(三)



成功
實話

出世藤の由來……………本誌記者(六)

◇赤裸々……………中野尅子(七)

◇處世川柳……………代田重雄(三)

◇法を敬ふの心……………清水對岳坊畫(六)

名僧
物語

歌人としての行誠上人 赤松月船……………(一六)

邑譚の
美苑

一寸したことです……………西郡正義(九)

說苑

淨土儼然……………前田聽瑞(四)

信仰相談

邪教退治の急所……………(三)

悩みと信仰……………(三)

どちらが偉い？……………(壹)

解答者・中村辨康

◇歌壇……………與謝野晶子選(六)

◇俳壇……………(四)

◇編輯後記……………(六)

小旅路の芭蕉……………宇野浩二(三)

說道(みち)……………梶野千萬騎(三)

玉井德太郎畫

信仰讀本

改增
訂版
補

錢二十二 價定 頁〇八版六四 付名假りふ總 著康辨村中

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷蒙から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならぬ。
今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を打開く。『淨土』誌上の著者の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

目次

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大野法道著 四六判定 價拾七錢
學教授 七〇頁 送料共
法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するが、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その媚々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ。

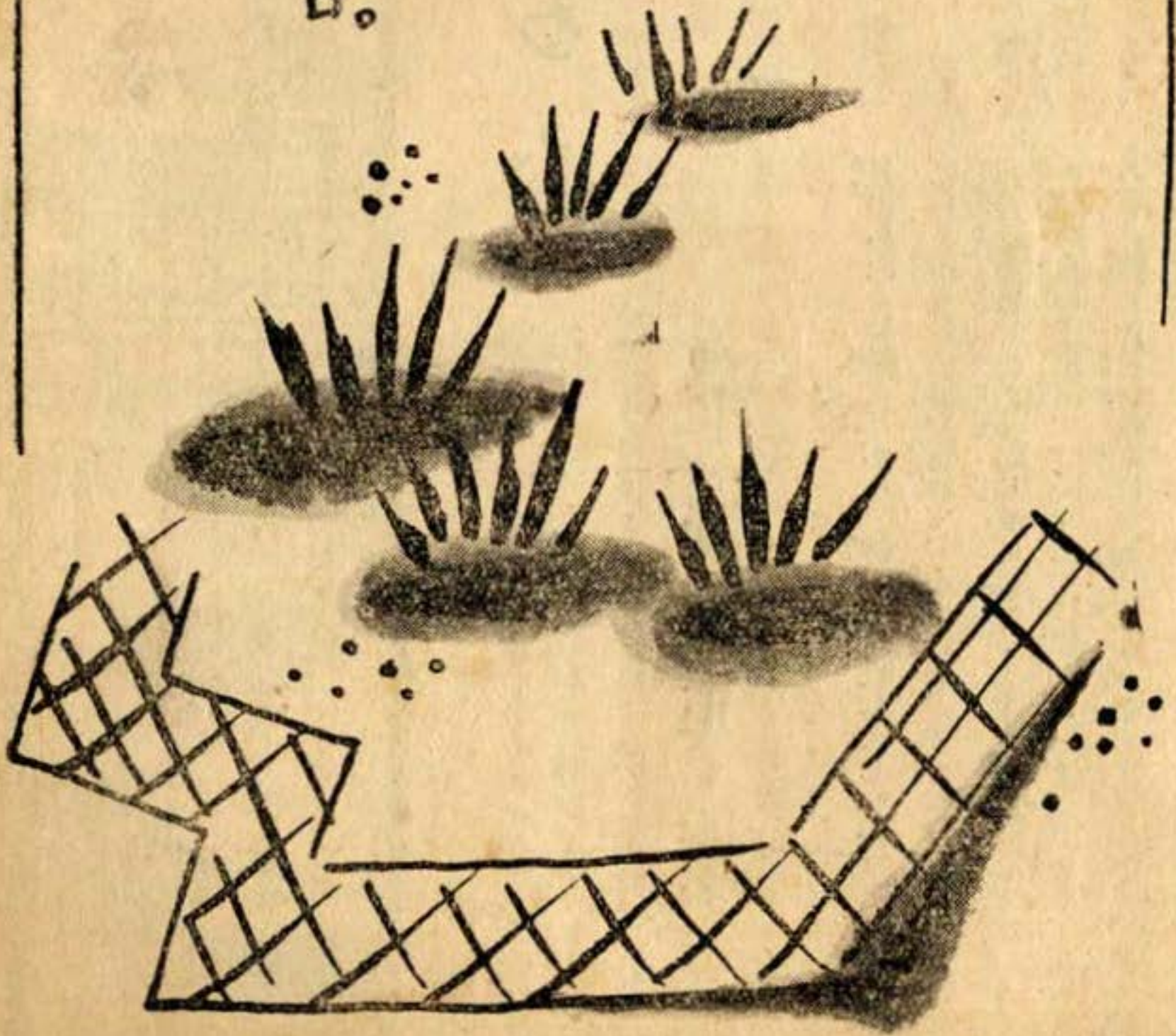
◆ 會仰鑽人上然法 所行發 ◆

淨土 三月號

たとへば葦のしげき池に
十五夜の月のやどりたるは
よそにては月やどりたりとも見えねども
よく／＼たちよりてみれば
あしさをわけてやどるなる
妄念のあしはしげけれども
三心の月はやどるなり

(法然上人)

るる。



香^{かう}を献^{ささ}げる心^{こころ}

眞　野　正　順

願^{ねが}我^{われ}身^み淨^{じやう}如^に香^{かう}爐^ろ

願^{ねが}我^{われ}心^{しん}如^に智^ち慧^ゑ火^{くわ}

念^{ねん}々^々契^{けい}燒^{しやう}戒^{がい}定^{ぢやう}香^{かう}

供^く養^{やう}十^{じふ}第^{だい}三^{さん}世^せ佛^{ぶつ}

まい、この佛^{ぶつ}教^{けう}徒^との朝^{あさ}は、度^{たび}ましくかつ清^{きよ}らかに、ひらかれるのを常^{つね}とします。

うつすりと、朝^{あさ}日^ひのかゝる奥^{おく}の部^へ屋^やの、まだ朝^{あさ}寒^{さむ}い疊^{たたみ}の冷^{ひや}えを

足^{あし}のあたりに覺^{おぼ}えながら、佛^{ぶつ}壇^{だん}を前^{まへ}にしてしつかりと端^{たん}座^ざし、しばらく四^よ邊^{へん}の一切^{いっけつ}を忘^{わす}れて、心^{こころ}を静^{しづ}め、やがて、前^{まへ}に置^おかれた塗^ぬ卓^{たふ}の上^{うへ}の古^{ふる}びた香^{かう}壺^{つぼ}の中^{なか}から粗^{あら}黒^{くろ}い香^{かう}片^{ぺん}の二^{ふた}つ二^{ふた}つをつまんで、香^{かう}爐^ろの火^ひの上^{うへ}に落^おす。そうして、静^{しづ}かに、くゆり來^くる、あゝ、ほのかに爽^{さわ}かな香^{かう}氣^きの中^{なか}に、胸^{むね}に掌^てを合^あせて、眼^めを瞑^めり、遠^{とほ}く佛^{ぶつ}の御^み姿^{すがた}を思^{おも}ひながう、夕^{ゆふ}日^ひの一日^{ひとひ}も、また淨^{きよ}き佛^{ぶつ}道^{だう}の上^{うへ}にあつて、



生きんことを希ふ。

この度ましい朝の勤めのなかに、たとへば、今や、清冽なる清水が全身を貫ぬいて流れてゆくかのやうに、雑念ことごとく洗ひ去られて、爽々とした心と身との自分が、こゝに誕生してくるのです。そして、純朗な生氣は、おのづから、全身に躍動し、一日の充實した活動のまことの基礎が、こゝに築かれてくるのです。

今回は、この「朝の勤め」のはじめに誦さまれる古い偈文「香のりた」を取りあげ、その含む深い意味を少しお話ししやう。この言葉の中には、また、佛教徒の一生を貫いて心に堅く持つてゆかねばならぬ大切な心構が「詩」のすがたで麗はしく現はされてゐるからです。

「願はくは、わが身淨きこと、香爐のごとく。」

考へて見ますと、この自分といふものは、過去のいろ／＼な「思ひ出」を秘めた壺のやうなものではないでしやうか。遠い昔の幼い自分から、今の現在にいたるまで、思へば、さまざまの事件や経験が、この自分の中に積重ねられて来た。「あの頃は」と、今は慕はしく思ひ出される甘い追憶もあれば、思ひ出せば、今でも慄然と膚に粟を覺えるやうな危いこともあつた。その、さまざまに或は笑ひ、或は嘆きしたことも今は、ことごとく過去といふ薄絹

の彼方におし隔てられて、すべては、たゞ思ひ出の白珠となつて、自分の上に残つてゐる。もうその時の恨みもない、悲みもない。時は一切を淨化し、すべては、みな一様に懐かしく思ひ出されてやまぬ「むかしの夢」である。かつて燃えた生命の火は、今は悉く冷たい一握の灰となつて、自分のなかにたまつてゐるのです。過ぎゆく我れは、ふたゝび還ることはない。かうしてゐる間にも、わが生命は燃えて、刻々に新たなる過去となつてゆく。それは、ちやうど一條の線香のふり落す白い灰の一片一片が、下の香爐の灰の上に落ち、次第に其上々と積み重ねられてゆくやうなものです。現在は刻々に過去となり、過去はまた常に新たなる過去に蔽はれて、遠い「思ひ出」はおのずから隠れとなつてゆく。

されば、偈文は、この身を「香爐のごとく」と譬えました。人の身は過去の灰を満した香爐です。人の生命とは、己れの過去の灰の上に、現にしづかに燃えてゐる火にたとへられしやう。

然し、かうして、過去は刻々に新たなる灰となり、その灰の上に、現在の生命は、また新たなる火となつて燃えてゆく間にも、私共は、たとへば、香爐の清らかな火を見るやうに、燃え切つた灰は、すぐに、さら／＼と崩れ落ち、火は常に、濁りなく鮮しく燃えてゐるでありましやうか。さうでなくて、たとへば、未だよく燃え切らぬ餘燼が灰の中にあつて、何時までも燻ふつてゐるや

うに過去の「行きがゝり」が、消えるでなし、燃え切るでもなし、何時までも、口惜しい意地や、思ひ切れぬ執着となつて、生活の上に影をさしてゐる、と云ふことはないでしやうか。實を云へば、私共の日々は、多く然うであります。大抵は、今迄の行がゝりに引ずられて、人に對し、仕事に對し、其日其日を迎へてゐるだけであつて、本當に、今日一日の生命を、純に新らしく、爽やかに生き切ることは稀です。

よく、勝手の外などに出来ますと、そこら掃寄せられた塵埃の山から、ぶす／＼煙をあげてゐるのを見ます。燃えるでなし、消えるでなし、たゞ何時までも燃つて、不快な煙を四邊にただよはせてゐる。ちやうど、そのやうに私共の生活の中にも、まだ燃え切らぬ過去の餘燼が残つて新しい生命を蔽ひ、古い行きがゝりに引きずられて、何時迄もぐず／＼と燃つてゐる。

現在が純によく燃える爲には、過去はすつぱりと灰になつてゐなければなりません。そうでなければ、現在の生命はよく燃えな。昨日を昨日とし、すつぱりと切りすて、この今日に新しく飛びこむ。それが、まことに善く生命を生かす道である。古人は「日に新たなり」と言はれた。日々に新たなる生命を得るためには、過去を以て現在を濁してはいけない。ふつつりと餘燼を留めず、まつたく新たなる我となつて、この今日の鮮らしき生命へと飛び

こんでゆく。かくてこそ、自己の生命は、まことに發潮と躍るのである。

また、かくの如く、現在に、よく充實して生きればこそ、この現在の生命は、善く燃焼し盡して、清白な灰となることが出来る。そうして、未來の生命を、爽かに其上に燃やすことが出来る。今日がまことに善く生きてゐなければ、また明日が爽かに生きられない筈がない。今日の燃つてゐたやうに、また明日も、その餘燼で昏濁されてしまふのである。

「わが身、淨きこと、香爐のごとく。」香爐の爐の淨いのは、そこに滿された灰が淨いからである。灰が淨ければこそ、火はよく燃え、床しい芳香を濁りなく發散することが出来る。厨房の七輪の上に、よき香木を焚くことは出来ない。なぜならば、その灰の中に、汁や脂の臭が染みこんでゐるからである。如何に新しい灰をついでも、臭氣はおのずから其器からにじみ出してくる。そうして香の氣を昏らしてしまふ。そのやうに、如何に高邁な志氣を以て、今日奮い立つても、人は屢々おのが過去の餘習に引ずられて、淺ましくそれを濁してしまふ事が多い。過去が、全く灰となつて、ゐないからである。

それ故、まことによく生きる爲には、過去を過去とし、全く灰となして、ふるひ落し、今日未來の新たなる生命へと爽やかに燃

え上る用意がなければならぬ。すなはち、過去に死なねばならぬ。まことに、「よく死する者のみ、よく生きる。」よく己れを生かさんが爲には、人は、屢々、自らに死なねばならぬ。

過ぎこし過去を振り返つて見ますと、幾歲月、あちらこちらと引廻されて来た、さまざまの自分の變化の跡が浮上つて來ます。その行路のすべては、必ずしも自分の望んだやうなものではなかつた。偶々爲した事が計らず果を結び、その果から復た新たな芽を出して、思はぬところに自分が來てしまつてゐる事もある。人の過ぎて來た過去は、たとへば、燃えてゆく野の火が、大地に黒々と残してゆく不規則な焼痕が、この先き、何處にどう擴がり、また何處で消え果てるか、今から定かに知ることは出來ません。

この過去の生命の火が燃え残して來た灰の痕、それを捕へて、私共は「自分」だと思ひ謬る事があります。

私共が「自分」といふものを思ふ時には、いつも、自分の爲した事の跡を顧みて、これを思ふ。計らず成功した事があれば、たとへそれに多分の僥倖が含まれてゐた事であつても、何とはなしに何時までも、誇りやかな自信を禁じ得ない。それと反對に、ほんの僅かな蹟きが原因となつて失敗したのであつても、それから後は、何とはなしに自信に曇りがかゝつて怯懦となる。いつも自分を定めるものは、自分の過去である。自分の踏み残した足跡に倚

りかゝつて、自分といふものを定めてゐる。

それ故、人には、その「境遇」が、思はぬ影響をすることが多い。よき境遇にあつて常に伸びやかな自己を見て來た者は、次第に自信を強めて、伸々と發育する。絶えず明るい自己の跡を見て來たからである。これに反して惡しき境遇にあつて、しきりに不運に見舞はれる者は何時か、卑屈な陰影の下に萎縮してしまふ。絶えず陰慘な自己の痕ばかり見てゐるからである。

人は常に過去によつて據まれてゐる。常人にとつてはむしろその過去こそ、その人の自信の全部と言ふ事が出來やう。

然しながら「生命の火」は、決して、その痕跡によつて其内容を定めることは出來ない。一寸の火種も、よく風を得れば、山の如き大廈を燒き、また 赫々たる火焰も、水に遭へば忽ちにして消え細る。自己を貫いて燃えつゝある生命も、また、其過去にとつた形の大小によつて其力を固定することは出來ない。

内に漲るこの生命の力を、たゞ其過去の灰跡によつて定めることは、たとへば、地上に落ちた陰影によつて、太陽の光を定めるに似てゐやう。愚なる者の譬に、水中に月の影を探る猿の群があげられる。然しながら、わが過去によつて自己を定むる者は、また、月を求めて水中に腕を入れんとする類ではないか。

もとより、この五尺の身を通じて現はれて來る生命の火ではあ

る。その營むところ、時には大に、時には小に、失敗もあれば、成功もあらう。然しながら、それは善きにせよ、惡しきにせよ。既に置殘されて行つた過去の跡である。大切なのは過去でなくて現在の生である。この現在の生命を、眞によく伸々と未來に燃して行くこと、それが最大の關心事でなければならぬ。

現在に、まことに生きるためには、過去は過去として、ふるい落されてゐねばならぬ。過去を過去としてふるひ落すためには、むしろ、こゝにある自己を死なせる事が肝要である。こゝに自ら意識する自己とは、實は過去の灰骸に過ぎないからである。されば、人は眞に生きる時には必ず自己を殺す。自己を殺し切ることによつて、はじめて其人は燦然として飛躍するが常である。

自己を伸ばすことは、人の屢誤るが如くこゝにある「自己」を伸すことではない。それは自己の生命を伸すのでなくて、生命の影を伸ばさうとしてゐるのである。自己を眞に伸すためには、影を去つて、その眞の生命に還らねばならぬ。まことに、自己の生命に歸るために、人はしば／＼その影を捨てねばならぬ。すなはち、自己に死なねばならぬ。

されば、宗教の要諦もまた「念死念生」にあると云はれる。絶えず形骸の自己に死ぬることに依つてのみ、まことに生に飛躍することが出来る。過去の形骸が絶えず洗ひ去られ、刻々に新たな

る生命へと流れ出づる生活。

たとへば、流れて常に新たなる清流のごとき生活。逝く日、来る日、常に新たなる「日々是れ好日」の生活。これが眞の生命の道であり、また佛教の道である。

「願はくは、我がこゝろ、智慧の火のごとく」

さきの第一偈は、人が本當に生きる道は、過去の殘骸をなげすて、精一杯に、この目前の生命に生き切ることにあるを教へました。次に、この第二偈は、この目前の生命にまことに生きる爲には、どんな心構をなすべきかが、教えられてあるのです。

「信仰の生活」とは、はげしく燃え上つてゆく火のやうな生活です。燃え上る火の姿を見てゐますと、すさまじい紅の焰は、そこに横はる薪の上に澄みかゞやき、あたりの空氣を震えかしつゝ、ひたすら天に向つて、燃えに燃え、我を忘れてゐます。人は誰れでも、熾んな火の姿を見るのが好きです。それは火の姿と人の眞の生命の姿とは、おのずから、通ふところがあるからでしやう。人が、ほんとうに充實して生き、精一杯に動いてゐる時は、火にたとへられます。我れを忘れ、相手を忘れ、利害得失までも忘れて、ひたすら生きる。このやうに、精一杯に生き得た時に、人ははじめて、本當に、何物にも勝る、快い生甲斐を感じることが出来る。人の誰れでも願ふところは、日々火のはげし

く燃えてゆくやうな、純一な生活の境地に、絶えずありたいと云ふ事ではないでしやうか。信仰の生活とは、すなはち、この境地をあやまりなく、我々に引出してくる事に外ありません。偶文に「火のごとく」と願つてゐるのはその心です。

「智慧」といふのは、よく、智慧才覺なぞと云つて、頭の働きの敏速なことを指しますが、佛教の意味する智慧は、そんな技巧的なことでなくて、「澄み切つた心のすがた」たとへば、火の赤熱して燃えさかり、遂に水のごとき澄明な姿に到つたやうな姿を指して云ふのであります。

私共の日常は、大抵、自己を中心とした利害の打算が先に立つて動いてゐるものであります。いよく仕事に深く入つて來るとかへつて何時か、自己を忘れ、利害を忘れてしまふ事があります。勿論、初めは、こまかく、自分の利害を打算し評價して、一歩々々極めて慎重に考へ／＼仕事に近づいて行くのであります。が、愈々仕事にとりかゝり其中にすつかり入り込んで、その眞最中となると、もう、細かい自分の利害など顧みて居られなくなり、たゞ、其仕事の成るか成らぬかのみに夢中になつて、自分の利害などは其爲に、却つて犠牲に供してしまふ。その位にならぬと、一體、仕事といふものは成就しないのであります。

このやうに、初めは、自分の利害から出發しながら、後になる

と、それを忘れ、それを抛棄してしまふ。これは人間の生活に含まれた一つの意味深い矛盾であります。

このやうな矛盾に氣がつく時、人は事もなげに、「どうも仕事の行きがかりで、あゝせざるを得なかつた」とつぶやくのを常としますが、こゝには單なる「仕事の行きがかり」と異つた、もつと高い力が強く働いてゐることに注意せねばなりません。

と云ふのは、今度、仕事、思ふやうに進まず、たとへば、荒濤の中を難航する小船のやうに、前に傾き、後に傾き、一進一退するやうになると、人は更に、その仕事の成否すら忘れてしまふからであります。すなはち、本當に仕事に眞剣となつて來ると、最早、その仕事の成否すらが問題となくなつてくる。

たゞ、かうして、自分を賭けて、仕事の中に没頭し、わが全力を盡してゐる、この努力精進の純情を以て、見えざる何者かに訴へんとする。眞剣な氣持が一杯に張り満ちてくる。いはゞ、自己が純白に證明になつて、たゞ「人事を盡して天命をまつ」といふ境地であります。

こゝに動いてゐるものは、もはや、普段の自分ではない。その前に來る一切の者を、その心の底から揺り動かさずんば止まない、純なる激情でありまして、然も、天に仰ぎ地に俯しても、愧ぢず怖れざる獨朗の境地であります。

このやうに、人は自己の利害に出發しつゝ、自己を忘れ、仕事の成否に没頭しつゝ、また仕事を忘れてゆきます。この不可思議な矛盾は一體何を意味するのでしやうか。このことは、やがて、人間の生命は、この日常の自己の形體を中心として動くときには、未だ本當の境地には來らず、かゝる自己を越え出づる時に、はじめて生命の眞諦に達し、眞に怖るゝことなき安心獨朗の境地に至ることが出来るものであることを示してゐるのです。

このやうに、越えてゆく生活を佛陀は「すべてを空じゆく生活」として示されました。生命の深まり行くにつれて、おのずから自己は空せられ、仕事は空せられ、あらゆる一切のものは空せられて、たゞここに昭々たる努力精進の純一の境地のみが現れて来る。かゝる澄み切つた心の境地こそ、すなはち、こゝに云ふ「智慧の火の世界」であります。

生命がいよく、眞剣に白熱的に深まりきたれば、一切は超えられ空じられてゆく。然も、かく一切を超えた時こそ、また、最もよく一切のものを生かす時であるのであります。

しかし、このやうな森嚴なる生命の眞諦は平常の生活では、ただ、希れに、自分が絶對絶命の境に追ひつめられて來るのでなければ現れて來ません。また偶々、これを味ふ時があつても、境遇少しく寛まれば、また忽ちにして忘れ去り、もとの凡墮な形骸の自己に還つてしまひます。

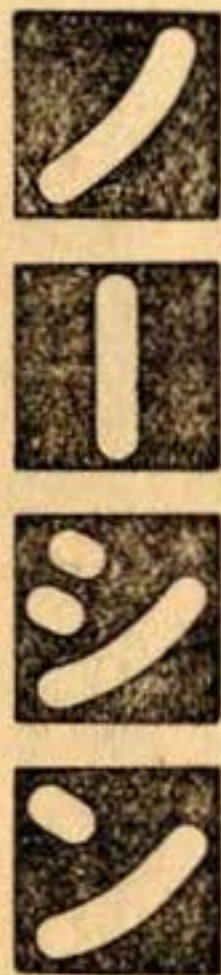
それならば、如何にして、かゝる莊嚴なる生命の中に、常に在ることが出来るか。それは次の偈の問題です。

(つゞく)

最も進歩した 純正頭腦藥

頭痛で頭がワレル程カンカンしたり、眉間の邊りが針で刺される様にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と泣行なくなるとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執務、裁縫、徹夜映画、觀劇後等で心身の疲勞を感じた時等、スグに「ノーシン」を服用せられよ。今「ノーシン」をのんだ事さへも、思ひ出さないう程キレイに痛みは消え失せて、それこそ暗闇から抜け出て來た様に頭はハツキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉強、讀書、家事、裁縫等を續けることが出来る。論より證據スグ試みられよ。藥價は三十錢、五十錢、一圓。全國の藥店やデパート藥品部にて販賣す。

頭痛に



頭痛に一番
効果に無害

町京區東市原古名 社會名合郎太長川荒 元遺製

感激	實話
----	----

一寸したことがすで

西郡正義

幸と不幸、その運命を左右する原因はホンの一寸したことにあるかも知れません。僅かな事が本で立身したといふ例も少くありません。このお話もその一つであります。

清い水、奇々怪々の岩で知られた名勝、九州耶馬溪の奥深い或る村——かりに或る村と申しておきませう——に實際あつたお話です。本名を云つても差支へはありますまいが、かりにKさんと申しておきます。Kさんは縣立の女學校を卒業後、此の村の郵便局の貯金係として、毎日眞面目に朗らかにいつもにこ／＼働いてゐました。

ある日——いつもの様に今日一日の事務を終り、現金の出納が一錢の差もなくピタリと合つて報告書等の作製も全部終り、ホツと一息ついた時のことです。突然あわたとしく駆け込んできた人がありました。見ると此の村のAといふ爺さんです。

「あの、少し遅くなつて終ひましたが五拾圓引き出したのですが……」

Aさんは右手に持つてゐた貯金通帳を振つて見せました。

「さあ、困りましたですね。もう時間も過ぎましたし……」

二人の視線は思はず時計に注がれました。四時の締切時刻はとつくに過ぎてゐました。

「それは困つた。是非今日ほしい金なんだが……」

おちいさんは如何にも困惑さうな顔をしてゐます。

暮れるに早い冬の日はどう次第に夕闇が迫つてきました。お爺さんも困りました、Kさんも同情しました。二人の間に沈黙が續きました。暫くしてKさんは突然思ひ出した様に、

「都合よく此所に五拾圓あります。これは貯金とは種類の違ふ金ですけど便宜お立替へ致ませう。印判を此の受領證に押して下さい。通帳は私がお預りしておいて明日拂出しの手續きを済まして歸りがけ持つて参りませう。」

暗くなつてゐたAさんの顔には急に喜色が現はれました。差出された拾圓札五枚を拜む様にして受取つたAさんは何度も何度も頭を下げて歸つて行きました。

「折角ですけど時間が過ぎましたので」とすげなく斷るのが正當であつても、一歩進んで、かうまで便宜を計つてくれた事は、Aさんに取つてどんなに嬉しかつたか知れませんか。

さうした事があつてから數ヶ月の後でした。KさんはAさんの努力によつて村の富豪との間に縁談がまとまり、子息の若奥様として盛大な祝典が舉げられました。

都合よくお金があつた事も、一つの原因ではありませうけれども、Kさんの一寸した頭の働きのあつたればこそです。(完)

念 佛 偶 記

佐 藤 春 夫

生活態度が消極的である事を他人は非難する。然し積極的であると自ら信じてゐる人間と、そして其人から消極的であると云はれる人間と何れが此世に足跡を残すか、實際の場合は分らぬ問題である。抽象的に積極消極を決め積極的でなければならぬと云つても人各々氣質があつて一様には論じられぬ。人各々その氣質に素直に従ひつつ最善を盡すより仕方がない。只さえ騒々しい世の中が積極積極の鉢合せではうるさくて堪るまい。無意味な積極よりは意味のある消極の方がなんぼう積極であるか分らない

といふこの一節は志賀直哉君がその手帖から抜書きしたものを集めて、里見弴君が雄辯荆棘の冠の序に代へた文章のなかの一部分である。讀みながら自分はそぞろに法然上人の事を思ひ出した。「只さえ騒々しい世の中が……」以下がわけでも左様である。一門を狩り立てた源氏と平家とが命がけで權力を争ふに急な、それこそ積極々々の極度に達してゐた世の中で、これ亦世の風潮に見習つて甲冑で身を堅めた山法師や奈良法師がどんな難題な持ちかけようと、果ては遠流の朝命でさへも忝くお受けしていつも念佛の一點張といふのだから消極的だか積極的だか分つたものではない。或はこれ



が志賀氏の所謂「意味のある消極の方がなんぼう積極であるか分らない」もので「意味のある消極」といふものかも知れない。

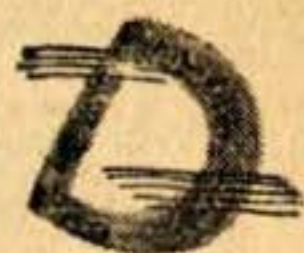
本来念佛の行といふのが消極だか積極だか分らないものなのに、その行を徹底的に遂行した上人の態度が言はば負数の無限大（ $-\infty$ ）見たいなもので消極の積極ともいふべき、不思議な謎のやうなものである。解くべからざる謎であるが異常な力であつたのは疑ふべからざる事實である。この力によつて浄土の一門が開かれたわけである。

「宗教は、貧民にとつては、快活以外のものであつてはなるまい」

これはフランスの近代の劇作家ジュール・ルナアルが一九〇〇年六月十八日の日記の一句である。何人でも心からお念佛を申すものには浄土に往つて生れることを約束した法然上人の宗教は、明日の完全な幸福を子供等に約束した父の言葉のやうな喜ばしいものである。一度これを信じさへすれば人は子供のやうに快活であり得る。浄土の教にもし所謂哲理がないと假定しても、この快活さへあれば立派な宗教である。ルナアルに遵へば快活以外のものでないところが有難いわけなのである。

「別の子細さふらはす……この外におくふかきことを存せば二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし……」

と上人が一枚起請文を記された時には、正しく理解よりも信仰を、會得よりも服従を要求して居られたのである。世相を鋭く看て取つた上人は後年の下剋上の風潮が早くも萌芽を發してゐるのを知つてこの教化があつたのであらう。禍を早く二葉のうちに摘み取つて置かうと企てるのは實にすぐれた事でもある。人ははじめ分厘のくひちがひには氣づかずそれが後に大きく延び擴がつてからやつと禍根を發見するのである。——この事でさへ智者でなければできない。



三來夜話



商賣は先祖へのつとめ

坂根彌兵衛翁のこと(二)

増上寺法主 大島 徹水

廢佛毀釋の嵐

徳川幕府の末の頃、三河から京都に上り北野の成等庵に住して、念佛三昧の暮しを送つてゐた一人の僧があつた。名を慧頓和尚と云ひ、凡そ世俗とは没交渉で、世のあわたとしさを外に、ひとへに隠遁して佛道精進に餘念がなかつた。その一向専修の和尚の態度にうごかされた時の西山泉谷の西壽寺住職は、北野より西山こそがまことの佛道修業者にとつて適切な塵外の地で

あると申し出て、遂に和尚を泉谷に迎へ入れ、自身は丹波に去つたのであつた。したがつて西壽寺に移つてからの慧頓和尚はますます道心を固め、一層ひたむきの念佛相續に邁進した。この和尚には少なからぬ歸依者が出来たが、中でも華頂宮家の歸依篤く月の一度の和尚の法話は、宮家のところからなる悦びをうけてゐた。こゝに語らうと思ふ坂根翁に關係ある吹原賢良師はこの慧頓和尚の孫弟子に當り、つまり三代目の西壽寺住職であつた。賢良師は師僧(二代目)の湛忍師と同様名古屋の豪家出であつたが、少年時代から才氣渾發で、詩歌をよくし、能書、博學、師僧の寵愛を一身に集めてゐた。さういふ點で、賢良師は早くから西壽寺と因縁深い華頂宮の常侍役を勤めてゐたのであつた。ところが御一新後、宮様が外遊の途にのぼられ、海外からの屢々の御書翰に接するたびに、賢良師は宗教家たるものも世界の大勢に眼を注がなければならぬと考へて來た。御歸朝になられた宮様が東山の杉の井旅館に宿をとられた折賢良師は早速詰めかけて三日三晩談議を聞はした。佛教信者である宮様の、廣い社會情勢に準じての寺院改良案などは殊の外に壯年の意氣に燃えてゐる賢良師の胸を衝いたのであつた。師も熱心に自己の抱負を披歴したが、その時以來自己の頭腦に燒

きつけられたものは、眞に新しい佛教家として立つために「先づ洋行する」と云ふ一念だつた。洋行する、その意志の實現のまへにはすべてが消えた。

世は廢佛毀釋の潮が押し寄せて來てゐた。時の京都府知事は寺院排撃の急先鋒であつた。次々へと大小寺院が廢寺にされる。血氣に逸る賢良師にはその現前の事實が堪らなかつたのである。「手を拱いて迫害を待つくらゐなら、一番自分から自坊を廢寺にしまはう。そして東京に出て、英語を勉強し、海外に渡らう。」さうひとりで決心すると、かねて親交のあつた、道心者阪根翁に、廢寺とした西壽寺を阪根家の下屋敷として呈供し、自分は一旦故郷に戻つて還俗、上京後ニコライで熱心に洋行準備の英語を學びつづけて行つたのであるが、不幸過勞が祟つて病死したのだつた。——その賢良師が故郷名古屋で還俗したときのことである。三河の傑僧志運律師が賢良師の志を傳へ聞いて同學のよしみからは非話したいことがあると賢良師に云ひよこして來た。そこで賢良師が志運律師を訪れると、律師は憂ひ顔で淳々と泉谷廢寺、還俗の非を説いたのであつた。「かういふ末法の世なればこそ僧たる者は愈々如法にせねばならん。」律師は教養なき野人にすら劣る僧侶の意志の薄弱さを嘆いて、賢

良師の洋行の志を遮ぎらうとした。しかし、「洋行から歸つたら、また僧籍に戻つて佛教徒として働く。」と答へる賢良師を如何ともすることが出来ないものであつた。

志運律師は奮然として京都に出て行つた。

「すべて開山の苦勞を辨まへねばならぬ。」

泉谷に來て、眼のあたり廢寺にされた西壽寺を眺めた律師の胸中に、ふつと浮び上つた考へは、阪根翁に頼むといふ一事であつた。勿論、律師自ら西壽寺復興のためには經濟上の補助、堂守の世話などあらゆる努力を惜しまれなかつたのである。しかも廢寺とともに本堂庫裡いづれも顔を反けずにゐられないまでの荒れ果てた寺院復舊の難事を、現に先住から下屋敷(別宅)として提供された當の阪根翁の手に俟つほかないとされたのは不思議な佛縁であるのに相違ないが、また翁を見込んだ志運律師の眼にもさすがに狂ひがなかつたのである。

翁未だ二十四五の頃、自家の借財整理中のことであつた。忙しい家業の目をぬすんで、隔日に泉谷通ひをした。家から一里半の道。或時は西山への道順をちがへて嵯峨に出てしまつたといふ逸話さへのこつてゐる。

この寺は元來黒谷本山の末寺であつたが、兎に角廢佛毀釋の

夥々たる世論の中に、一旦廢寺とした寺院の再興を計るのは全然不可能事とされ、本山も世間を顧慮して翁等の申し出を却下した。翁はたゞ信仰の一念から黙々として信徒の間をまはり、有志を募つて官省の折衝から堂宇、財政の世話に奔走した。

西壽寺が知恩院末となつて復舊したのは明治十二年、血と涙の三年間の翁の眞摯な努力が酬いられて落着いた。そしてこの復舊事業が、翁の寺院の世話の最初のものとなつたのである。——したがつて西壽寺は翁にとつて、生涯離れ難いものとなつた。翁がその一生を通じてつねに親しく世話役としてつとめられた寺院では、この寺のほかには然院、北野安樂寺、圓通寺、東山西光寺の四ヶ寺を數へ上げることが出来るが、西壽寺はそれの中でも翁の第一の關心的となつてゐた。その境内に現存してゐる阿育王塔の完成を見た翌日、翁は六十年の西壽寺の世話を終つて他界した。然しその話は後に譲らう。

新義先師

真道生

三好山主 三寸法師

西壽寺復舊の話題が京都の僧俗間の口にのぼるやうになると翁の評判は大層なものであつた。

ところで、先代の借財を返済し、古金商の家業も順潮な波に乗つて發展するやうになつてから、ますます翁の心に根を張つて來たゆるぎない信念は、佛の加護によつて家が立つたゆゑ、

「商賣は先祖へのおつとめ」と云ふことと、「遊ぶ時には佛へのお禮のために寺院の世話をする」と云ふことの二つであつた。自己の信仰をひたすら増長することによつて、僅かづつでも強く正しい者に生長してゆきたい、これが翁の念願であつた。

月の晦日に借金取への言譯で苦勞を嘗めた苦闘時代の翁の心は、そのまま人生の行路に喘ぐ人々の難儀をすくはうといふ、願に置き換へられた。夏の酷暑には店先きに麥湯接待を設け、車力、郵便配達夫その他働く者への奉仕を卒先して行つた。また四國巡拜の人々には杖と笠をほどこすのを常とした、等々。佛あつての店。翁は日課念佛三萬遍を固く守り通した。店が

睡眠僅か三時間

繁榮するやうになつてからは日中の多忙に思ふに任せず、夜、家内中が寢静まつてからひとり端坐して日課をはたすのであつた。従つて睡眠も僅か三時間ほどしかとらない。そして早朝の清水寺・知恩院その他への禮詣りを一日とて缺かさなかつた。先祖の命日、親近者の祥月には必ず家にあつて別時を修した。その木魚の音で、近隣の人々は「けふは何日だな」と日を知つたと云ふことである。

ちやうどその頃、下京の大雲院には北條的門師が住職されてゐた。翁は早くからの門師に歸依されて親交あつたが、當時の大雲院は廢佛毀釋の餘波も手傳つてかなり荒れてゐたのであつた。ところが、こゝに興味のあることは、その門師がつくづく若い翁の日常行爲を眺め、またこのやうな末法の世にあつて泉谷復舊の難事を成し遂げた翁の奇特な信仰心にひどくうごかされて、奮然自坊興立の意を決したといふのである。

阪根のやることを見てゐると、ちつとしてゐられない。師は會ふ人ごとに心からさう語つた。勿論、大雲院興立には翁が師の重要な相談役となつて世話を盡した。宿坊の本光院復興などは、殆ど翁ひとりの世話で成立したのであつた。

淨土宗でいちばん大切な行儀は臨終行儀であるといふところ

から生れた「臨終講」——大雲院のそれは翁の肝煎りで作られたのであつたが、毎月十六日に有志が集合して別時を嚴修する。その集ひの有名な時間の正確さを京都の寺院間に流布させたのは、まことに翁の性格の眞面目を語るものであつた。翁がいつも時間通りに大雲院の山門に差しかゝつて来る。「おやもうそんな時間かしら。」門前の花屋では、その翁の姿を見て自家の柱時計の狂ひを直す程だつたと云ふ。

(つづく)

待望の信仰生活叢書！

大正大學教授 松浦一著

定價拾八錢送料二錢
四六判七十一頁
總ふり假名付美本

生 き る 力

本館大衆佛教講座に於て好評を以て迎へられたる著者の明哲にして緻細なる信仰生活の眞の意味を「生きる力」として現代人に諄々として説いた明朗な近代人の信仰叢書である

東京市小石川區表町

發行所

傳 通 會 館 院
電 小、三〇七
電 小、五八二五
振替東京六〇九三

上
人
語

歌
人
としての

行
誠
上人

赤
松
月
船

【一】

南條文雄博士が、印度の佛蹟を巡拜して歸朝し、知恩院に行誠上人を訪れたところ、上人は座をすべり、うやうやしく南條博士の足をいたゞいて、

「釋尊行化の土を踏んで來られた尊い足だ」

といつて、涙にむせられたといふ話を聞いた事がある。

今はこのお二方とも逝くなつてしまはれた。

『行誠上人文集』の中に、「嵯峨の釋迦像」と題した一小品が收められてゐる。何べん讀んでも讀み足りたといふ氣がしない。昨年夏の終り頃、用務を帯びて京都の嵯峨に行き、自動車に砂塵を捲き上げながら清涼寺の前を疾驅したが、通りすぎた瞬間、はつと上人の一文を思ひ出し、匆々たる自分の生活をかへりみ、上人の潤澤渾厚な行持にひき比べて、今更のやうに深く／＼恥入つたことであつた。

「嵯峨の釋迦像」は、嵯峨清涼寺の本尊様である釋迦牟尼佛の御像に就いて、上人がその結縁の數々を書きしるされたものである。それに依ると、上人は十九歳の四月十九日はじめて京都に上り、同じ月の廿五日に嵯峨の清涼寺に參詣して一夜の通夜をされた。印度傳來の像ときくさへ尊く、又宗祖法然上人がそのむかしこの寺に七日の參詣をなされたといふゆかりのあとの慕はしく一首の歌を詠んで居られる。

それから三十年ばかり経つて、再び京都に上つたので、重ねて、清凉寺に詣でたところ思ひがけなく舊知の老僧に出會つた。それは越中の光導といふ上人であつた。夢かとはかり打喜び、

「それにしても何用あつてはる／＼出て來られたか。」

と尋ねると、

「何用といつて他に別事はありませぬ。たゞ

こゝの本尊様が拜みたいばかりに……」

年久しく越中の奥に山ごもりして、もう年も七十に近い老僧が、この寺の本尊様に逢ひたいばかりに、わざ／＼雲煙はるかな路を声都へころ／＼ざして來た信心深いおもひ！

上人はその人に逢ふたことがなつかしく、それにもましてひたすらその人の志が有難かつた。

それから更に何年か後に、清凉寺の釋迦牟尼佛を小石川の傳通院に拜請して開帳の供養を行つたものと見える。法要の翌朝、當時上人は大藏經版行の事業に携はつて居られたの

だが、恰度梅檀「瑞像佛」の校正が出た。折も折、佛像に因縁深い書物に眼をさらすといふのは、よくせき佛の引合せが深いのだと、伊佐といふ老人と二人で讀み合せをしながら喜ばしくてならなかつた——かういふ事を極めて簡潔な、しかしながら思ひのいかにも濃かな筆づかひに托して述べて居られるのである。

汲みみればあさきすづりの水にさへ

大悲のかげはうつろひにけり

といふ歌で結んである。

【二】

上人はついぞ怒つた顔を見せた事がなかつ

たさうである。

特に忍耐が強く

かつたといふ

ことがあつた

であらうが、

内に腹の立つ

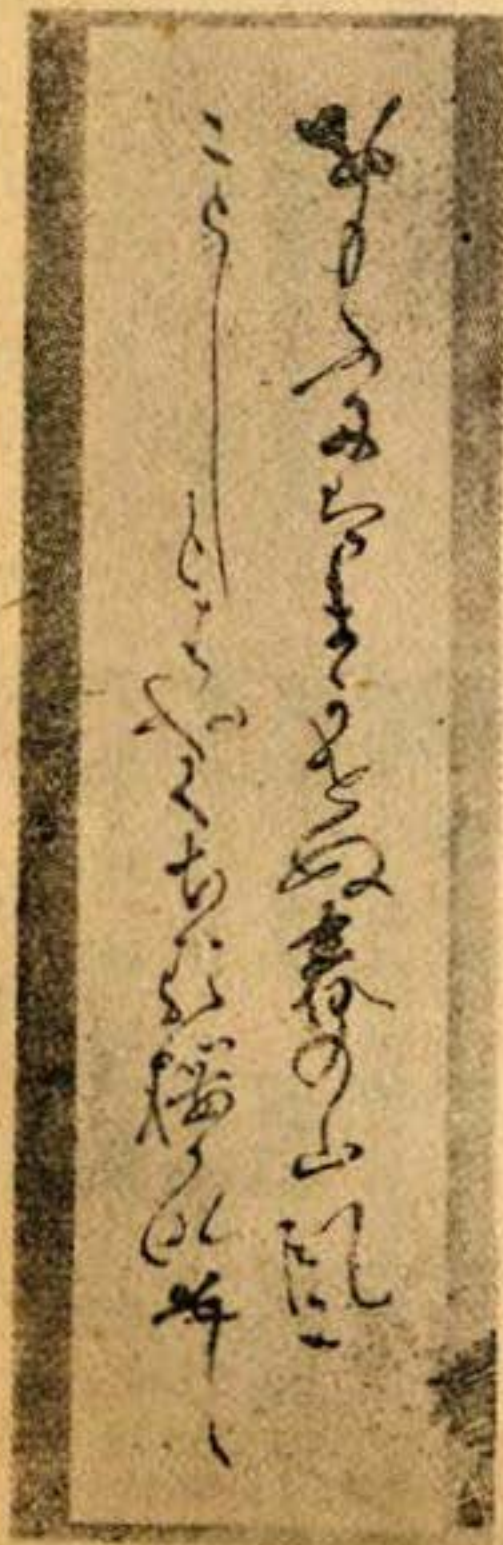
ことがあつて

も、おもてに色をあらはさぬといふのではなく、腹を立てるといふそのことがなかつたらしい。つまり何事も上人の心を曇らすまでに至らなかつた。それほど廣くすずやかな境涯に住して居られた。勿論、これは或る年齢に達してから後のことであつたかとも思ふ。

で、人々は上人を稱して「羅漢行誠」と諡名をしてゐたさうである。

もともと上人は、大の羅漢信者で、俗弟子の菊池容齋に羅漢の像を描かせて平生拜んで居られたが、又日を期して羅漢供といつて羅漢様をおまつりする集ひを催ふされた。集ひといつて敢て法會を申さなかつたのは、決して儀式ばつたことをしず、詩をよみ、歌を作

おもふにはまかせぬ春の山風にことしもはやくちる櫻かな。



つて、談笑歌語、極めて親しみと和氣に満ちた集りであつたから。

羅漢を無學といふ。無學は此上學ぶことのない煩惱妄想を拂ひのけた清淨人の世界である。

行誠上人が羅漢様を拜まれたといふのは、

志こころされるところをおのづから知ることが出来ると同時に、又、行誠上人の拜み方に、兎もすれば冷たい嚴めしい感じて以て迎へられ

る羅漢様を春風のあたたかさに置きかへて見せて呉れられるものがある。

結局やはり、行誠上人その人の、人の世界、人の味ひに歸すべきものであらうと思ふ。

【三】

「おかしき話」といふ文章が上人にある。これは歌人としての閱歷なり心構へなりを上人自身で註脚せられたものと、見る事が出来る。單にア

ネクドート

として見て

も非常に面

白いもので

ある。

戌としの

秋の彼岸に

——と、そ

の文章は書

き出してあ

る。戌年な

人 上 誠 行

ら明治十九年に當るやうである。この年の三月、上人は、増上寺を退董して病を深川の本誓寺に養はれたことが、傳記に見えてゐるから、場所はまさしく本誓寺の隱寮に於てであつたらうと思ふ。羅漢供の日を機會に、水野忠敬、高崎正風、伊藤祐命などの諸氏が寄り集ふた。

「正風ぬしは、五十ばかりにもなりぬらん、御歌所の上坐たるよし、祐命ぬしもおなじ宮内省の人なり……」

これは上人の記すところである。御歌所の

上坐は申すまでもなく所長である。

その時、祐命氏が披露した次のやうな物語

によつて、上人が、正風氏にとつていかに久

戀の人であつたかがわかる。

——何年か前のことである、宮内大輔をし

てゐた杉聴雨氏が、宮中で正風氏に歌の草稿

を見せ、

「これは天覽に入れてもよいほどの歌かどう

か。」

と問ふた。正風氏は一讀して驚き顔をしな



から、

「一向名前の知らぬ人だが、これは尋常一様の歌よみではない。きつと一かどの徳者でありませう。」

と答へた。

「流石は高崎さんだ。眼識が高い。」

といつて、宮内大輔は莞爾とする。

「是非その人に逢つて見たい、一體どういふ筋の人で、何處にお住ひでせうか。」

宮内大輔の杉さんは、アハハハとさも満

足さうに笑つて、

「縁山の生佛ですよ」

と軽く答へた。正風氏は、

「あゝ、さうか」と、うなづいたのはよいが

縁山と泉山とを聞き違へてしまった。縁山と

いへば三縁山即ち増上寺のことであるが、泉

山は京都の泉涌寺である。

それから間もなく、正風氏は京都に行く用

事が出来た。何より早く生佛に逢ひたいとい

ふ心一杯、京都に着く早々、尾崎定夫といふ

歌人を呼んで、

「泉涌寺に歌をよまれる生佛が居られるさうだ、お目にかゝりたいと思ふから、都合はどうか、尋ねて見て呉れまいか。」

といひつけた。

行誠上人自畫讃 托鉢の繪に

春風けさうら／＼とたちいでぬ

初音ほどこせかどのうぐひす



知らぬといふ人は無い！」

聲高く叱りつけられたので、尾崎氏も、或

はさういふ人が居られるのかも知れないと、

わざ／＼泉涌寺に尋ねて行つたがわからぬ。

歌をよむ人はあるのはある。そこでその人の

書いた短冊を持つて歸つて見せたとこ勿論

似てもつかぬ歌である。そこで又散々尾崎氏

を叱り飛ばしてゐるところへ、本願寺の赤松

連城さんが訪ねて來たので、高崎さんが歌を

よむ生佛の話をする、

「それは縁山の生佛の間違ひでせう、増上寺

の行誠上人のことですよ。」

と赤松さんが教へた。尾崎氏はすかさず、

「これは先生の御志が薄いからです。私な

ぞは京都の歌人なら知らぬといふ人はありま

せぬ。」

と敵討をしたので、御歌所の大先生もすつか

り閉口して頭を掻く、はては三人聲をあげて

呵々と笑ひ崩れた

伊藤祐命氏が一くさり語り終ると、今度は

正風氏が一膝、前にすゝみ出て、

「杉さんに歌を見せられた時から、是非お目にかゝりたいと、そればかりおもつてをりましたが、今日ははからず日頃の願ひがかなふて、これほどうれしいことはありません。上人の歌は、歌の道ならぬほかの道から歌の世界を打開いておいでになります。」

といはれた。

高崎正風氏がそれほどまでに感に入つた歌といふのは「寄 燈 述 懷」と題した一首で、

いたづらに枕をてらすともし火も

思へば人のあふらなりけり

【四】

「おかしき話」はまだつゞくのである——

「おのれ遊學のころは、景樹などの盛に行はれし時にて、人もこの人を見よといひしかど沙門は佛道をこそ尋るなれ、歌道は餘の道なりなどいひて、一度も謁見をとらざりしは、いとく／＼なま／＼しき見所なりけり。」

自分が若いころ、勉學の當時は、香川景樹

の歌が盛んにもてはやされた頃で、わざ／＼景樹翁に逢つて見たらとすゝめて呉れた人さへあつたが、沙門は佛道をこそ勵むべきで、そのことのためにたづねるところがあるといふのなら聞えてゐるが、歌道は、佛道以外の道である、沙門が佛道以外のことに師を求めゐるのは道理でないといつて、一度も逢ふこともなくてしまつたが、いとく／＼なま／＼しき見所なりけり」こゝで上人いかにも自分の考へ方が未熟であり、若かつたことを後悔歎息して居られる。

さういふわけだから、勿論、歌などつくりなどとは思ひもよらず、年月をすごして來たが、近頃、古人の歌をあれこれ見てなかなか結構なものだと思ふにつけ、いつの間にか口眞似をするくせがつき、少々題詠などをしたけれども、どうも思ふやうによく詠めない。ところが、一蓮居士といふのが、念佛の道をたづねて、自分のもとへ來るやうになつてから、

「あなたは景樹翁の門人だし、歌人なのだから、

らわしの歌を直して呉れまいか、その代りわしは佛様の方であなたの師匠にならう。」かういふ約束を結んだ。それから歌の會に出て、歌の話をきいたり又歌をよみもしたが歌の話もよくはわからず、作る方はなほさうまい調子に行かぬ……」

上人は、このやうに、いかにも謙抑な叙述をつゞけたあと、今度は、歌作の心がまへについて、

「近頃は歌よまば、道のまがらざる方によまばや、人にみするにもその人の志をすゝむるやうによまばやと思ひ定めてよめるが、少少はとりゑなりしにや思はる。よくよみてはめられたくもなきなり、この妄念は歌よむべき第一の禁忌なり、たゞおのれが志を正しくする爲めによむが第一の心得なるべし、この志は即ち佛の誡めたまふ所なるが、おのづから歌にもこの趣はあるなり……」

【五】

上人は西行法師の歌を愛讀せられたといふ

ことであるが、いかにもと首肯される節がある。

入相のかねつく／＼と思ふにも

後の世いかにならむとすらむ

いくたびかきくとはすれど曉の

かねにもさめぬ長き夜のゆめ

かういふ歌を讀んでゐると、山家集にある

つく／＼と物をおもふにうちそへて

をり哀れなる鐘の音かな

またれつる入相の鐘の音すなり

明日もやあらばきかむとすらむ

世の中を夢とみる／＼はかなくも

なほ驚かぬわが心かな

といふやうな歌を思ひ合さずには居られな

い。敬三法師が駿河へ歸るといふので、別れ

に來て一夜をとまつたときのうたがある。

あまりにな叩きそ水鶏かどの戸を

明くれば歸る人もこそあれ

旅の宿にきぬたを聞いて、

旅にねて夜のきぬたの音きけば

ひとつ／＼にかなしかりけり

難波へ歸る人に肌着をおくるに添へてよんだ一首、

年をへしきならし衣うすけれど

かさねてきゆけ秋の夜寒に

それは仕立下しの新衣ではない、年ひさし

く自分が肌につけた「着ならし衣」である、

この場合、着ならし衣であるが故に、一入新

情があたゝかく流露してはゐないだらうか。

春風の吹くとはすれど糸柳

みだるゝほどは靡かざりけり

かういふ繊細を極めた歌があるかと思ふと

手枕のちりもすゑじと思ふかな

わがひとりねの床なつの花

といつたいかにも清らかな歌がある。私がい

つも誦してやまぬ歌は、ある草庵にやどつた

時によまれたもので、

世のなかをかけはなれたる寛より

たえず流るゝ岩清水かな

といふ一首である。調子も高らかだし、一脈

の清澄、肺腑を流れ去つて爽然たるものがあ

るではなからうか。老境をうたはれたいくつ

かの歌には、靡落とした世界からうちひらけてゐてしづかに朗かである。

まどろまばまたさまさまの夢や見む

ねさめうれしき老の手枕

人はみな昔がたりとなりにつむ

むかしを語る人もなきまで

冬がれの木立に似たるわが身かな

落葉一つものこらざりけり

冬がれの一首、それこそ本當に「羅漢行誡」

の姿を浮彫にするものであると思ふ。

國寶 右京權大夫藤原隆信筆

法然上人御影

堅一尺四寸・横八寸
絹本寫眞プロセス版
精巧典雅十數度刷

精巧無比！ 神々しき上人の御影は實

に眞に迫るものあり。上人を景仰し、念

佛生活にいそしまれる方は是非朝夕座右

にかゝげて恭敬せられよ！

一葉 壹圓（送料不用）

申込所

法然上人讃仰會

處世川柳

(柳川及び
柳川拾遺)

紙離はころふ時にも夫婦づれ

夫婦夫婦、夫婦は常にこの紙離の如く、
一心同體でありたし。



我持った財布の紐でしめられる

義理人情を缺いでも、金を蓄える人があ
る。それも程々にせぬと、五段目の興市
兵衛ではないが、この川柳の通り。

詩を作るのがいつちいゝ上戸なり

詩を作るより田を耕せ——人間は酒にと

代田重雄選句
清水對岳坊畫

らはれると自己をさらけ出す。あの人が
と常に思つてゐる人がとんだ醜態を演じ
る。酔ふても禮節を重んじる、そこに人
格の光りがある。人間たゞ田さへ耕して
居ればいゝのだつたら、中學や大學はい
らぬ。

わが尻はいはずに帯を短かゞり

自分の缺點を棚へ上げて、人の事ばかり
責めるのは、どうかと思ふ。



惡業の後悔蟬や蜻蛉なり

入學ぶ時に學ばざれば、後に悔ゆる事あ
らん。あの時一緒になつて、蟬や蜻蛉つ
りなどをせずに、せめても少しでも手習
ひしてゐたら……實に後悔は前にたゞず
母の眼へ反哺の乳をしほり込み

子を持つて知る親の恩 吾が子を大事に
育て上げることは母への反哺の孝。





やはらかな嫁は姑の齒が立たず

剛に剛は、火に油をそぐやうなもの、何事も常にやさしく、反らはず「ありたけの力でたく嫁の孝」。この古川柳の心掛けでやられては、鬼の姑も齒が立つまい。

旅は道連れ大名と樽拾ひ

旅は道連れ世は情け。とは申せ大名に樽拾ひとは極端だ。だが人生の長旅、持ちつ持たれつ、この奥越同舟で行くところに眞の情けの世がある。

學問と梯子は飛んでのぼられず

最初から六つかしい學問を覚えやうとて、そりや無理だ。世の中は一氣に偉くなつたり、幸福になれるものではない。物事すべて順序といふものがある。十段の梯子を登るには先づ最初の一段から踏んで行かねばならぬ。焦ると落ちる。

男浪より女浪の舵がとりにくい

女は喜怒哀樂の情が極端で始末に負へない場合がある。人生の航海まことに女浪の舵はとりにくい。



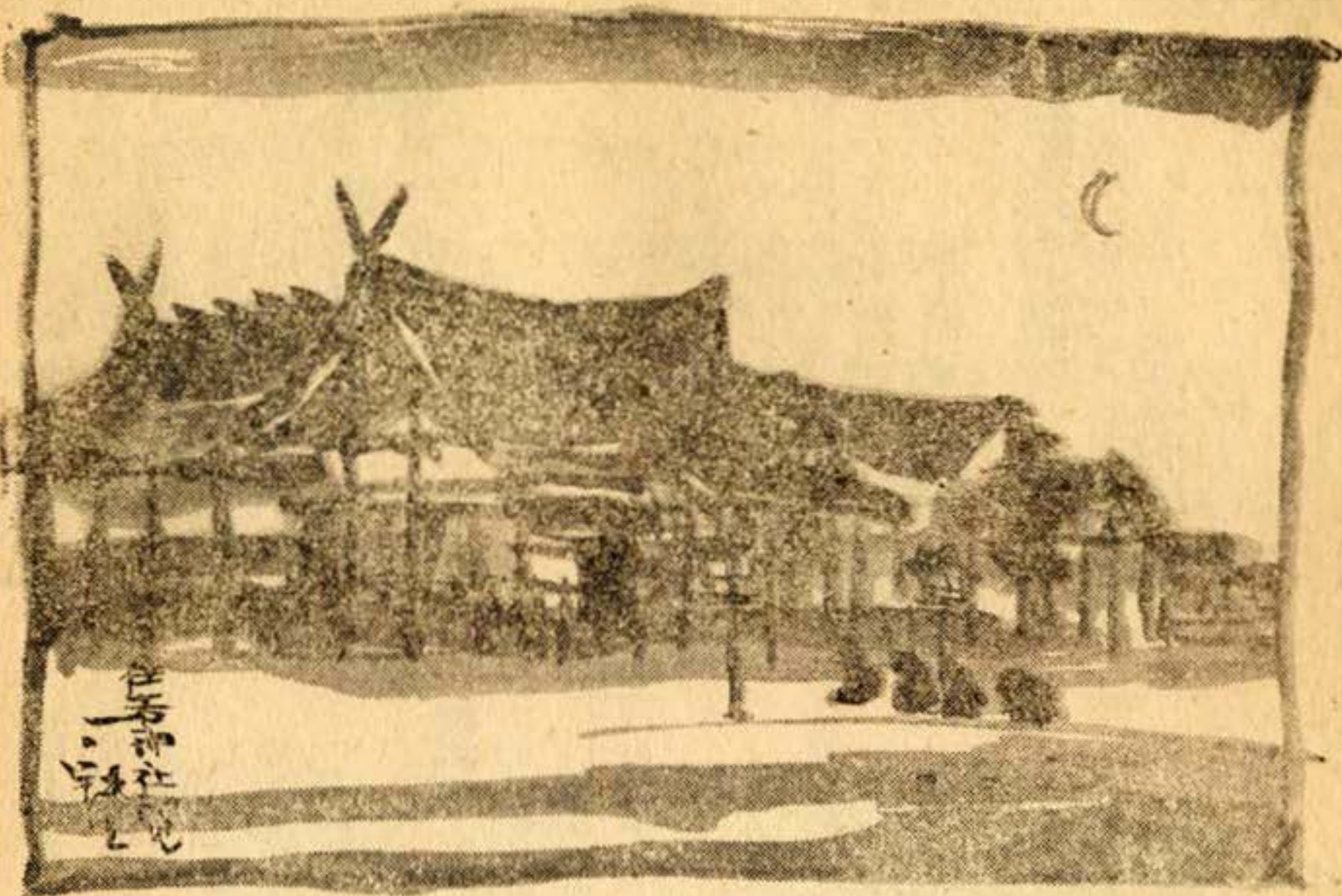
石工の覺えた歌は辭世ばかり

年がら年中コッ／＼と文字を刻んでゐる石工、定めし澤山の字を覺えたしらうと思ふと、豈圖らんや、辭世の歌より他記憶にないとは、心細くも皮肉だ。現代にもこんな人間は澤山に居る。

片乳房握るは慈の出来初め

這へば起て、起てば歩めの親ごゝろ、と吾が子に對する親の慈、それはこの小さな悦びの中にあり／＼と見える。





説小
旅路の芭蕉

宇野浩二作

小島一谿畫

芭蕉は自分の病氣が不淨であることを憚つて、見舞客を自分の病室に入れないために、惟然にいひつけて、その事を紙に書いて門に張りつけさせた。そこで、看病の門人たちは壁を隔てて次ぎの間に控へた。さういふ間にも、車庸、畦止、舍羅、何中、渭川等が見舞に來たり、又、伊丹の兎貫まで見舞に來たが、それ等の人々は、みな病室には案内しないで、看病に來てゐる門人たちが交る交る應接した。――

十月六日、曇つた肌寒い朝であつた。芭蕉は前の晩からずつと眠れなかつた。今でいふ不眠症のやうな病氣まで出たらしいのである。

が、明け方に少し眠つて目を覺ますと、煮麵を三箸ほど食べた。それから、暫くして、芭蕉は、去來を呼んで、

「いつぞや、あなたと一緒に嵐山へ行つたとき『大井川波にちりなし夏の月』といふ句を作つたことがあつたが、あれはあれで幾らか夏の景色が出てゐると思つてゐたが、この間、園女の所へ呼ばれて行つたとき、『白菊の目に立てて見る塵もなし』といふ句を残して來た。……ところが、事柄は違ふが、『塵なし』と『塵もなし』では、同じ言葉を使つてあるので、今ふと氣になつた。……で、あの『大井川』の句は捨てて、『清瀧や波にちりこむ青松葉』——と改めたいと思ふのぢやが、どうだらう。お前はと思ふ？」と云つた。去來は、生死の境に立ちながら、たつた一つの句にこのやうに心を悩ます名匠の、藝術的良心に心を打たれた。彼は、目に涙を浮べながら、

「目のある者は、この句を同案、同巢と思ひませう。私には、園女の貞潔清廉と、大井川の清瀧の絶景と、この二つの句に同じ言葉を使はれたのは、却つてよい對照になつて、却つて絶唱になつてゐると思ひます」と、辛うじて、これだけ答へた。

それに對して、芭蕉は何とも答へなかつた。——

併し、芭蕉の病氣は、一日毎に悪くなるばかりであつた。殊に、去來に『大井川』の句の推敲の話をしたのが、衰弱し切つてゐる體に、可なりこたへたらしく、その翌日は下痢の回數が多くなり、體力も氣力もめつきり衰へて來た。それを見ると、芝道は堪らなくなつて、八日の朝、佳吉大明神に平癒の祈禱を立てに行つた。その時、奉納物と奉納句を手向けて來た。その奉納句は花屋に詰めてゐる門人が一句づつ作つたものである。去來が、病める師を慰めるために、その奉納句を、師の枕邊で詠んだ。

落つきやから手水して神あつめ
初雪にやがて手ひかむ佐太の宮
水仙や使ひつれて床はなれ
日にまして見ます顔なり霜の菊
こがらしの空みなほすや鶴の聲

その他に五句あるが略す。

かういふ門人たちの慰藉や看護にも拘らず、また木節の苦心の處方や熱心な手當に拘らず、芭蕉の病狀はますます悪くなり、下痢の度數は次第に増し、脈搏は沈み、身心共に衰弱する一方なので、或る日、木節が「外に醫者を一人呼んでは」と去來に相談した。去來がそれを芭蕉に傳へると、芭蕉は「ど

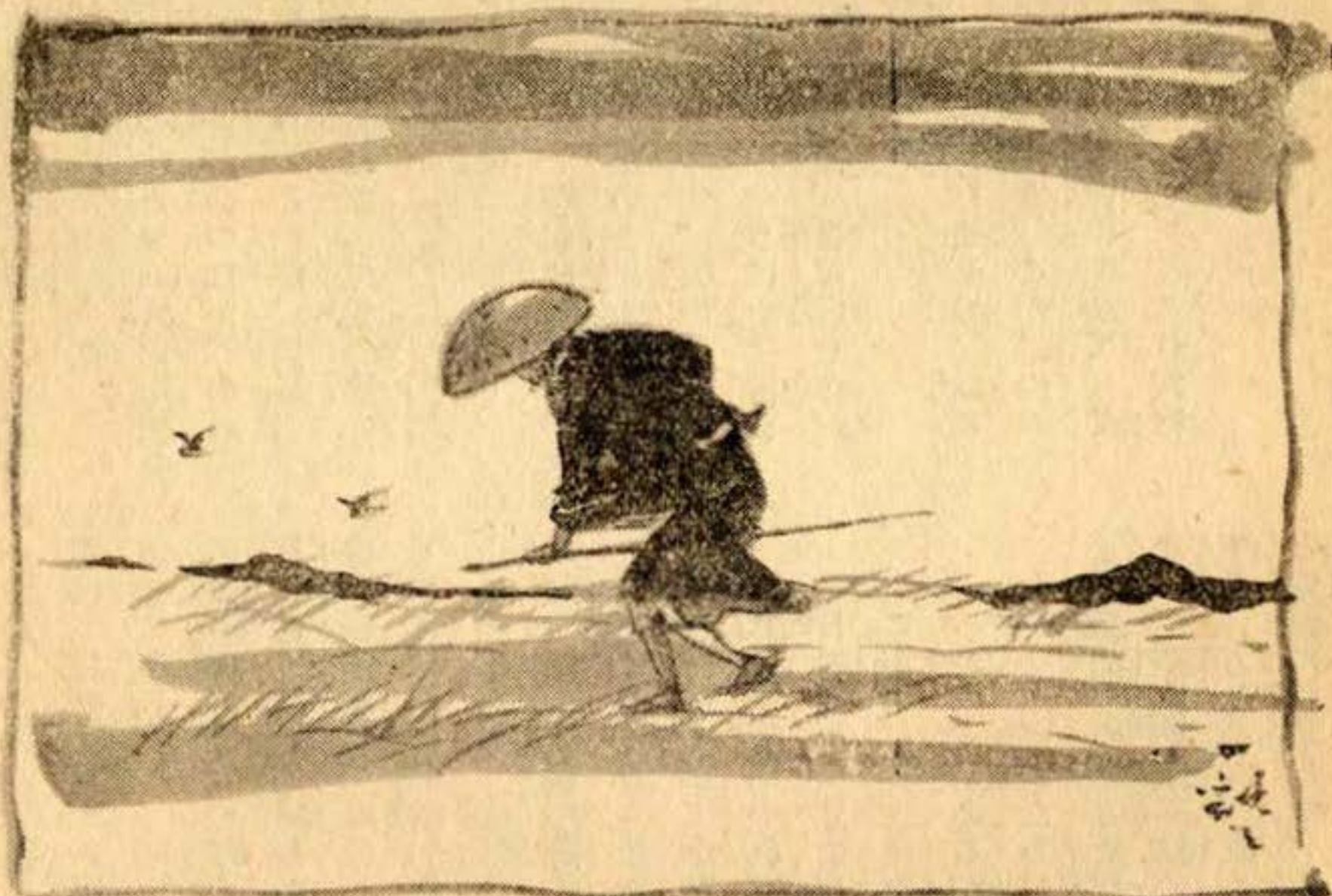
木節
正秀
吞舟
乙洲

のやうな仙法があつても、天命といふものはどうにも仕方がない。私は唯木節の神法に任してゐるから、外から醫者を呼んでくれなくてもよい、と云つた。

それを去來が隣の部屋に待つてゐた木節に傳へると、そこにゐた門人たちは皆目をつぶり、しばらくの間、誰も物を云ふ者はなかつた。しばらくして、乙洲が聲をひそめて、

「もし師匠が、このまま、お起ちになれないやうな事になりましたら、今後のわれわれの行く道は、……何か御遺言のやうなものでも、……」と去來の方に向つて云ふと、

「その事は、私も氣になつてゐたのです、と去來は答へて、二三人の門人と一緒に、靜かに芭蕉の寢室に入つて行つた。さうして、



芭蕉の枕頭に靜かに坐つた三四人の門人たちを代表して、去來が云ひ出さない先きに、仰向きに寢たままの芭蕉が、低い聲で、

「私には、別に、辭世の句はない。私がこれまで詠んで來た句が、みな辭世ぢや」と云つた。

去來は唯「はッ」と云つた切りであつた。二日見ない間に、こんなに變られたか、と思つて、乙洲は此の芭蕉の言葉を聞かぬ前から滿眼に涙を湛えてゐた。

その日、(八日)下痢數十回。いくら夜が更けても、芭蕉は眠らなかつた。ときどき眠つてゐるように見えるが、覺めてゐるのか、夢を見てゐるのか、端に見取つてゐる者には、何か少しも分らなかつた。唯、去來だけがいたく變り果て寢れた師の顔

の中に、夢とも現ともなく、何か魂が跳くやうな表情が、静かな寂しい顔の中に、ときどき浮ぶやうな氣がした。

眞夜中頃のことであつた。寢てゐる筈の芭蕉が、微かな、やつと聞き取れる程の聲で、

「去來、丈草」と呼んだ。芭蕉の直ぐ枕元にゐた吞舟がそれを聞きつけて、次ぎの間で休息してゐた去來と丈草を呼びに行つた。芭蕉は、枕元に去來と丈草が坐つたのを見さだめると、

「旅に病んで、旅に、病んで、夢は、枯野を、かけめぐる、」と云つた。それを吞舟が書いた。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

去來が此の句を靜かに讀み終ると、しばらくして、芭蕉は「これは、『旅に病んで、枯野をめぐる夢心、』とでもいふ風

に考へたのぢやが、まあ、病中の吟ぢや。……明日にも、……

今にも命が終るかも知れぬ中で、……如何に好きな道とは云

ひながら、寢ても覺めても、夢は朝雲暮煙の間に駈け廻り、

覺めては山水野鳥の聲に驚く、……といふことは、これを佛

の道で云ふと、妄執、つまり心の迷ひといふのであらうが、こ

れは、どうしても、それから離れられない。……」と云つた。

これを聞きながら、去來たちは、唯無言で頭を下げてゐた。

やがて、芭蕉が一頻り本當に眠り入つたらしいので、彼等は次ぎの間に歸ると、こもこも云つた。

「眼ある者これを見れば、魂を飛ばさん、耳ある者はこれを聞かば、毛髮これがために動かむ。」

その翌日（九日）は、その夜中の事の興奮のためか、明け方から、下痢の度數しれず、芭蕉は今にも死ぬかと思ふ程の苦しみをした。が、晝頃すこし苦痛が薄らいだらしいので、古い着物や夜具などの、垢のついたのや不淨なのを新しいのと取りかへたり、洗つたりした。芝道が洗濯婆さんを連れて來たり、園女の所から菓子や水仙の鉢がとどいたりした。洗濯婆さんだけでは洗濯がし切れないので、門人たちの手の明いてゐる者が交る交る手傳つた。芭蕉は非常に喜んで「私は野の果、海の傍、山でも、林でも、草を敷き、石を枕にして、野倒死にする覺悟であつたのに、こんな立派な蒲團に寢かされ、そのうへ澤山の親しい友達の手厚い看護を受けるのぢやから、これでいつ死んでも本望ぢや」と云つた。

十日は、初時雨が降つた。明け方から、容體が變つて來て、例の下痢の度數が殖えた上に熱が出たので、取止めのない讒言をいふやうになつた。木節が芍藥湯を與へたが、一向に効驗が見えない。併し、晝前には、少し樂になつたらしく、「梨

が食べたい」と云つた。木節は堅く止めたが、いづれにしても最早や長くないと思つたので、剥いたのを少しばかり出すと、芭蕉はほんの一切たただけで止めた。ところが、案の定、忽ち苦しみ始めて、一時は氣を失つてしまつた。幸ひ、夕方頃に人心がついたが、この日は看護の門人たちに一人として食物の喉に通つた人はなかつた。

十一日も、朝から時雨が降つてゐた。が、夕方、思ひがけなく、江戸の其角が訪ねて來た。彼は、江戸の友達と伊勢詣りをし、大和から、紀伊、和泉と廻り、大阪に來て、初めて師の芭蕉が大病に罹つてゐることを知り、驚いて駆けつけて

來たのであつた。が、彼は、たまたま上方に旅に出たために、かうして師の生前に一目でも會ふ事が出來たのを、淺からぬ因縁、と悲しみの中にも喜んだのであつた。

其角は取る物も取敢ず芭蕉の病床を見舞つた。骨と皮ばかりになつた師の顔を見ると、感情家の彼は、何も云はぬ先きに、目に涙を一ぱい溜めた。芭蕉も其角の顔をじつと見たまままで者を云はずに涙ぐんでゐた。其角も言葉なく唯俯向いてゐた。やがて、丈草や去來が其角を次ぎの間に呼んで、芭蕉の病氣の經過を彼に語り聞かせた。この晩は、其角が來たので、連中は、交り交り芭蕉の看護をしながら、次ぎの間で夜

もすがら四方山話に耽つた。

十時頃であつた。病床に看護してゐた者が次ぎの間に來て、芭蕉が粥を食べてみたいと云つてゐると告げた。それを聞くと、連中は皆ちよつと愁眉を開いた。炊事係をしてゐた次郎兵衛が早速臺所へ行つて粥を炊いた。それを程よく茶碗に盛つて進めると、芭蕉は珍しく旨さうに食べた。土鍋の底に残つた粥を去來はおし戴いて食べた。

病中のあまりすするや冬どもり

去來





去來が斯ういふ句を作つて連中に見せると、
 惟然と正秀は、前の晩、一枚の蒲團を引張り合
 つて眠れなかつた事を次ぎの如き句にした。

引ばつて蒲團に寒き笑ひ哉

惟然

おもひよる夜伽もしたし冬籠

正秀

この二句は連中を十日ぶりで笑はした。この
 二つの句を読み上げる聲が隣室に聞えたらしく、
 病人の芭蕉も微笑をもらした。そこで、丈
 草が次ぎのやうな句を作つた。

うづくまる藥の下の寒さかな

丈草

これを讀手の惟然が読み上げると、今度は隣
 室から、

「丈草、相變らず上手だ。いつ聞いても寂
 が整うてゐて面白い」と云ふ低い皸枯れた芭蕉
 の聲が森閑とした秋の深夜の空氣を通して聞え
 た。

支考は、日頃から芭蕉の句を、彼の死後に、
 一つの集に纏よめうと思つてゐたので、この機
 會にと思つて、その事を去來に相談すると、去
 來は、色をなして、「師は不斷から名聞から遠ざ

かつて居られる、そればかりでなく、今少し御病氣がよくなつてゐる時に、そんな事を、と云つて、いつになく激しい言葉で支考を叱つた。そこで、支考が次ぎのやうな句を作つた。

しかられて次の間に立つ寒さかな

支考

この句にも病床の芭蕉は微笑した。

十一日の晩、芭蕉は、寝ながら自分で筆をとつて、故郷の兄宛に、「お先に立候段残念に思召され候」といふ書出で、兄も最早や老年であるから、「お心靜に御臨終成さるべく候」云々といふ遺言狀を書き、他の三通の遺言狀は支考に代筆させて名と花押だけ自筆で認めた。その一は「杉風へ申入候、濁子へ申入候、嵐雪を始として門人方残らずへ」といふので、そのいづれにも思ひもよらぬ所で「相果て御暇乞」も出来なかつた詫びと、「いよいよ風雅」の道に精進し、俳諧を最後の樂みとするように、といふ事を書かせた。これを見ても、芭蕉が臨終に際しても俳諧を宗教の如く信じてゐたことが分る。その二は昵懇の間柄の猪兵衛と好齋老人とに、壽貞が世話になつた禮と、その禮が會うて出来なかつた詫びを認めさせた上に、門人の桃鄰に、「不慮なる所にて相果て」對面できなかったが、力を落さずに、自分のなき後は、杉風、子珊、八桑などには、といふ事を書かせた。その三は省く。

十二日の朝早く、芭蕉は、木節を呼び、最早や臨終の近づいたことを述べ、醫者としての木節を信じてゐるから其節はよろしく頼むと告げた。次ぎに、去來を呼んで、彼が勘當同様にしてゐる門人の路通を自分のなき後は見てやつてほしいと頼んだ。

去來と話した後、芭蕉は、左右の人々を成るべく退け、不淨を清め、香を焚き、安臥して、靜かに眠つた。門人たちは次ぎの間に固唾を呑んだ。正午頃、芭蕉は、目を覺ましたかのごとく、あたりを見廻した。傍にゐた者が、助け起として、粥を進めると、芭蕉は、僅に唇をぬらす程、それに口をつけただけであつた。

その日小春日和だつたので、障子の蠅が頻りに集つた。蠅が病人の方へ飛んで行くといけないと思つて、二三人の門人が、烏鶯を竹の枝につけて、障子に止まつてゐる蠅を取りにかつた。それに上手下手があるので、それを見て、芭蕉は、をかしがつて、何か口の中で云ふやうであつた。が、その少し震へるやうな唇の動きが止まると共に、芭蕉は動かなくなつた。午後四時頃であつた。

それは、元祿七年十月十二日であつた、年は五十一歳であつた。

(をはり)



信仰相談

(解答) 中村 辨 康



一、邪教退治の急所

(問) 大本教の神が、り、法華經宗の加持祈禱などには常識や佛教教理にて解明し難き不可思議なる靈通これあるやう存じ候へども是をしも神通力となすものに候や。(小生考ふるに、神通力とはより正理に解し得るものと心得候。)又、行者に潜在する暗示現とするや。(インチキの推量許りでもなきやう) 大衆を惑はすこの機縁について、明確なる斷定御教示賜りたく候。(東京・淨土乘願行者)

(答) 神通力と云ふものを魔術的なものと解して居るのは、婆羅門教などの極く幼稚な宗教であります。即ち天眼天耳神足宿命他心の五つを五神通と云つて居ます。まあ占見たやうなものでせう。天眼は何んな遠

方の物も見得ること、天眼は何んな遠方の音でも聞えること、神足は何んな處にでも行けること、宿命は何んな人の過去でも見通すこと、他心は何んな人の心も見透し得ることですから、此の五つの現實的利用は一種の占ひとして、其宗旨の呪術者の職業的なものであつたのが、段々其呪術者の力能と信ぜられるに至つたものかと思はれます。それは普通の人のだつて想像力、推理力と云ふものがありますから、或る程度の宿命通、他心通はある筈ですし、精神的な意味での天眼天耳(哲學や藝術の世界)もあり得るし、また心は何處にもでも飛んで行けるものですから、其意味でも神足通もあり得る譯ですが、それを極度に誇張して不思議な靈力と考へたり考へさせたりしたのは、一

般が極めて幼稚で、呪術者との間に非常な距りがあつたからです。佛教では此の魔術的な意味に解せられた民間宗教の迷信を淨化する爲に、此五通に更に漏盡通と云ふものを加へ、此漏盡通を以て最大最強なる神通力としたのでした。漏盡通と云ふのは煩惱(漏)の盡きた生活、即ち正しい生活力と云ふ事です。此正しい生活力(漏盡明)を得た者は、眞理に對して眼も耳も明らかになり(天眼明、天耳通)緣起の理に依て過去も現在も明らかに推察され(宿命明、他心通)正しい行ひがドンドン出来る(神足通)と云ふところから、三明六通八解脫と云ふやうな事も云はれたので、決して魔術的な意味としてではなかつたのでした。けれどもマナイズム(マナと云ふ靈力ありとするもの)など云ふ民間信仰がかなり私達の思想の中に深く巢喰ふて居て、かうした氣持が中々抜け切れない爲に、後世神像や佛像や其護符や其行者などに「マナ」がのり移つて不思議を現はすと云ふやうな信仰を助長し、迷信的な傳説も傳へられ、それを巧みに

利用するものも出て来て、一般にかうした類の暗示を受けて来て居りますので、たまたま精神統一状態などになると飛んでもない事を口走つたり、常人の想像し得ない推理を行ふやうにもなるので、何うも不思議だとか靈力があるに相違ないとか云はれ初め、其人もそれで食が喰られる處から、遂に職業的になり、結局教祖などにも祭り上げられるに至るもので、洗つて見れば別段大した事でもないのです。

また加持祈禱と云ふものは、眞言密教などが傳へて居りますが、法華宗などの祈禱は此の眞言密教のものを取入れたのに過ぎません。之なども中途で佛教に入つて來たものでありまして、佛教本來のものでなく、儀式としては随分變手古なものです。然し眞言などでの本當の意味は現在民間信仰で考へられて居るやうなものでは無かつた筈です。私は眞言の事は存じませんが「加持とは佛の三密の力を衆生の三業に附加して其衆生を加持すること、祈禱とは佛力を信者に附加し信者をして、其佛力を受授せしむる爲なれ

ば祈禱を直に加持とも云ふと辭書にも書いてありますから、私達が佛の如き正しき生活をしたいたと、佛に祈ることを祈禱と云ひ其一分が實現し得たことを、加持と云ふのでせう。また三密とは身體と言葉と意との事です。また三密加持と云ふのは佛の如き生活の出来ることを云つて居る譯です。然るにそれは仲々容易なことではありませんから、天部の神様や又は菩薩などを眞似ることを段階的にやつて、段々最後の目的たる大日如來へまで進めて行くのです。例へば不動明王を前にして、不動の印を結び不動の坐を構へ不動の眞言を唱へ不動を觀念して行く。さう云ふことを練習して成功すればまた外のをやる。かくの如くして大日如來へまで練習を積んで行くのが、眞言の加持祈禱なのでせうから、一般に考へて居るものとは餘程相違して居る譯で、かうした三昧法を行つて自分の心を高めて行かうと云ふのが其目的だとすれば、加持に依て自己改造をするこ

とでなければなりません。それを自分の悪い方は棚に上げて、手前勝手な御都合をよくするものが加持祈禱なら、寧ろ社會に害毒を流すものとして排斥せねばならぬ事です。こんなものが、神通力だつたら世の中は百鬼夜行の状態にならぬとも限りません。眞實生活から比べると本當に馬鹿馬鹿しい程インチキなものではありませんか。之も畢竟はだまされる人があるからで、一般人が精神界にうといからです。だから一日も早く凡ての人が正しき信仰を得て、かうしたものに乗りられないやうになつて頂きたいものです。

二、悩みと信仰

(問) 極樂は現在の延長である云ふのが私の信仰です。信仰を知らぬ人でもその生活が正しければ未來も亦極樂往生人であり、如何に信仰が強くてその生活が矛盾してゐる者は不往生者だと思ふのです。現在と云ふものが安心であれば、なにも未來のことを云々する必要がないと云ふのが、現在の私の心です。しかし、反省してみると、私は得られぬ欲望のために悩んでゐます。良心の命じるまゝの生活行でないことを大變悲しく思ひます。

私の信仰観では正しく私こそ地獄行です。
現在の生活に悩みがあるから。

そこで阿彌陀様の救済ですが、阿彌陀佛の救済は因果の法則を破るか云ふことです。私は佛を信じ御名號を稱へますが、稱へ乍ら私の心は少しも救はれてゐません。次々と欲望の悩みが起きて來ます。私は往生することが出来るでせうか。悩みがないのがほんたうの信仰と思ふのですが。悩んでゐる私の信仰にはどこかに矛盾するところがあるやうに思はれます。私の信仰の矛盾を御教へ下さい。

(青森 青年K)

(答) 生活を正しくする事が佛教の根本目的であります。仰せの通り「人間の弱さ」とでも申しませうか、反省すればする程、親鸞上人の云はれたやうに「地獄一定」が痛感されます。然し人間に此痛感があればこそ信仰がある譯です。若し本當に横から見ても、堅から見ても正しい生活なら、それこそもう完全な佛教人ですから、其儘で結構どころではなく、本當に生きた佛です。

貴君は「欲望に悩まされて居る」と仰しや

いましたね。夫れが私達人間の姿で萬人共通する心情ですよ。あゝも仕たいかうもしたいと思つても仲々實現困難ですが、それどころか、喰つて行く事さへ満足に出来ないのが現實です。何うすれば收支つぐなふ生活が出来るか、働いても働いても足りないといふ云ふ私達の生活こそ、本當に見じめなものです。無論一部には御金がたまふ程の生活をして居る人もありませうし、定まつたサラリーで收支の合ふ生活をして居るものもあるでせう。然しそれは極めて少數の人で例へば一千戸數ある一小町村でそんな人が幾軒あるでせうか。まづせいぜい一割か二割三割とまではありますまい。あとの七八割は皆な血みどろな生活をしなければならぬのですから、其處に何の正しい生活が生まれせう、また其二割三割の人にしても夫れ々々悩みがあつて、病人が絶へないとか、突然な災難に會ふとか、色々悩みの多い事と存じます。で誰が見ても呑氣らしいと思はれるのは全く數へる程しかありませんが、それにしても夫れ相應の苦勞はある筈で、全く

悩なき生活と云ふものは人生にはありませんから、餘程の教養の高い人でない限り正しい生活をする事は困難です。孔子と云ふ聖人でさへ晩年になつて漸く心と生活とが一致したと云ふではありませんか。之は生活の正しさを單に道德に置いて居るからです。心の慾望を道德で整理して行かうとするからです。貴君の仰しやる因果法則で行かうとするからです。一に一を加へて二となる生活は正しいでせう、然しさうしたキツチリ几帳面な生活は、出来るものではありません。だからこそ信仰が必要になる譯です。然し信仰と云ふものも生長し行くもので固定的なものではありません。私達の生活が常に進展するやうに、信仰も段々伸びて行きます。また學校に入りさへすれば直ぐ學問が出来る譯でなく、段々學ぶことに依て理解力が生長して行くやうに信仰に入つたからとて直ぐ徹底的な信仰生活になる譯には行きません。だから念佛したからとか書物や御話で納得が出来たからとて、徹底的な信仰生活は容易に出来ませんが修養次第で出

來得られるものだと思ひます。私は念佛に依て段々訓練が出来て行くと思ひて居ます。一例を申しますと、惱みのある時、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と一心に唱へますと、やがて惱みの半分は消えてしまします。さうして何とかして、切り抜けようとする勇氣と覺悟とが湧然として湧いて來ます。反省すべきを反省し爲すべきを爲すと云ふ決心が附いて來ます。また失敗した場合などでも一心に念佛して居ますと、自然に心にゆとりが出来て、諦めるべきを思切つて諦め、更に捲土重來の氣持を巻き起して參ります。それは私達の小さい心が、阿彌陀佛の大きな心の中に融合するからです。其處に現實的な阿彌陀佛の救済があるではありませんか。私達の現實は因果の法則よりも因縁の法則に依て行はれて居ります。細財にしましても百圓預けてある處へ百圓また預けたから二百圓になったとしましても、事實は利子が付いて二百何圓かになつて居ますし、また都合に依て銀行が戸を閉めて其結果、二百何圓かが五圓か三圓位にしかならぬとも限りません。之が

品物になると一層因縁法が發揮されて來ます。物に依ては使ふ程價值が高くなり、或は使へば使ふ程價值の減じるものもあり、使はずにしまつて置いて高くなつたり或は役に立たなくなつたり色々な變化を見せます。之がまた生物になりますと、一層ハッキリして來ます。一粒の麥が播かれて十粒にもなりそれが二三年繰返へされると、幾斗と云ふ程にもなるかと思へば、場合に依てはスツカリくさつて、一粒もとれなかつたと云ふ事にもなります。之が更に人間の心持と云ふ事になると、一層因果法が當てはまらなくなつて來ます。たゞ極りをつける便宜上、計算とか法律とか社會道德とか云ふ因果律がありますが、さう云ふ事で一應整理しなければ整理が出来ないから出來たまでの法則にすぎません。世の中の現象と云ふものはそんなに單純ではない筈です。

て居るからで、一に一を加へて二になると云ふ簡單なものではないからです。ですから私達の生活は、信仰に入ればすぐ惱みがなくなると云ふやうな、簡單な人生ではありますまい。簡單な惱みは無論雜作もなく取れはしますが、それは多く考へ方の相違から來る惱みで、理論に依て解決の出来る事柄です。即ち見惑(理性の上の惑ひ)は正見(覺醒)に依て頓斷し得ると云はれるのですが、本能的な慾望(思惑)は修養に依て漸次整理して行くより外はありません。但し其修養を、道德でやるか信仰でやるかが問題で道德でやるのを聖道門と云ひ、信仰でやるのを淨土門と區別されたのです。信仰法の淨土門に依れば、阿彌陀佛の大願業力大増上緣力に依つて、私達は煩惱のあるがまゝに救済されると思ひて居ります。即ち南無阿彌陀佛と本氣で阿彌陀佛に南無すれば、其一念の瞬間は、確かに阿彌陀佛の中に融け込んで居ますが、その一念が十念となり百念となり千念となれば、其間丈阿彌陀佛の中に統一されて居る譯で其處に救ひが成就

して居ます。然し口では南無阿彌陀佛と云つて居ても、心がそれに伴つて居なければ融合とも統一とも云はれませんから、瞬間丈でさへ融合統一の事實を経験することが出来ないのです。自分の本當でないのを棚に上げて置いて、念佛して見たが何の事もなかつたと、よくそんな事を云ふ人がありますが、それは餘りに蟲のよすぎる話で、全く問題外だと思ひます。然し口先きでもよいから、擧げず屈せず稱名すれば、丁度卵が温められるやうに信仰の眼が段々明いて來ますから、自分が段々反省され段々自分を頼む心が無くなつて阿彌陀佛に絶対歸依する感情が湧いて來ます。其時を入信と云ふのですが、其時以來其人の念佛は口先き丈でなく本當の念佛になるのです。貴君の御手紙を見ますと、貴君はもう信仰に入つて居ると存じます。唯だ悩みと云ふ問題で悩んで居られる丈のやうに見えます。

然し考へて見て下さい。私達は私達に悩みがあるからこそ、阿彌陀様にすがるのではないでせうか。阿彌陀様にすがつて「悩み

なき私に私を改造して下さい」と御願ひするのでせう。自分では自分で思ふやうに改造が出来ないから、如來様の中に私が心を融け込ませて如來様の御力で自分を改造しようとする譯ですね。だから貴君の仰しやる「悩みなき生活」となるべく信仰して行くのですから、もつと元氣を出して念佛にいそしんで下さい。屹度解決する時が來ます。念佛して少しでも悩みが薄らいで行けることこそ少くとも現實的な私達の信仰生活ではありませんか。

三、どちらが偉い？

(問) 神さまと佛さまと、どちらが偉いのでせうか。(神奈川・迷へる者)

(答) 神様と言つても色々で、我國の神様は大體に於て「カミ」即ち「上」の義で、自分達より上の人、若くは尊い人として敬ひ得る人々の事を云つたのだとの事です。尤も天御中主神とか、天照大神とか云ふ御名前は、何れも宇宙神のな意味を持つて居りますが、八幡様とか天神様とか云ふ事になりま

すと、私達とそんなに遠くない方々であります。又、私達に「上」の意味が明瞭になります。然し我國には儒教が入つて來て「天」と云ふ思想が混り、佛教が入つて來て印度の神が(多くは眞言系統の宗旨が引つばつて來たものですが)祭られて色々な意味の神様が混然として尊崇せられ、思想的にも混雜して來たので、名は均しく「神様」と云ひましても、之を一つに引つくるめて同じやうに考へることが出来なくなつて居ります。

また佛様と云ふ事も、本當の意味は天地の大道を覺つて正しい生活をなし、人々の悩みを安らかにし、人々をして正しい生活をなさしめんと努力する「覺者」のことを「佛」と云つたのですけれども、我國で神佛習合と云い事が考へ出され、權化とか權現とか云ふ思想を生じ、遂には此世を去つた誰でもを「佛様」と云ふやうにさへなりましたから、此處まで來ますと「カミ」とか「上」とか云ふ事と殆んど同じ意味になつて仕まう譯です。ですがら神様と佛様の優劣を考へることは無理です。

二宮尊徳の信仰

奥平 祥一

二宮尊徳先生は信仰を持つてをらない人のやうに今日まで多くの人々は思つてをつたのでありますが、それは大層もない誤りでありまして、私如きは、寧ろ先生は實に熱烈な信仰に生きた人であると思へばこそ、限らない尊敬の念を捧げてをるのであります。

文政十二年、先生四十三歳の正月、先生は野州櫻町復興について、周圍の人々から非常な誤解を蒙り、遂に藩主大久保加賀守忠貞に對して讒言されたのであります。

勿論、先生には一點何等やましいところはな

い。この時の判決は讒者の惡戒によつてけりを結んだのでありますが、先生はこれを以つて決して足れりとはしなかつたのであります。心中深く省るところがあり、事件決済後も獨り悶々として心樂しまなかつたのであります。

先生はこの時程深く神佛のことを思ふたことはないのであります、係役人達を櫻町陣屋へ送り返してしまつた後、先生はたゞ獨り江戸は虎の門の金比羅や、人形町の水天宮、川崎の大師などに參詣して、心の落付場所を探ね歩いてをるのであります。

尤も事件が発生してからといふもの、先生の心には、今度といふ今度こそは、到底人間の力



一寸來い！

吉水 辨道

同じ言葉だが

「一寸來い」といふのは鳥の鳴く聲なのだ。何といふ名の鳥か知らぬが、大きさは鳩位もあらう。鶉に似た羽の色をしてゐて、頸から腹へかけて赤と紫とのだんだらがある。とても敏捷で、コソ、といふ足音にもびつくりするやうな羽搏きを立て、飛び立つ。聞くところによると、さる富豪の別荘に飼はれてゐたのを、飼育人の不注意から、逃げ去つたものだとのこと、

では解決の望みがないといふことを深く悟つて
をられたのであります。

その證據には、文政十一年四月に、自分支配
の村方に「ごた／＼の起つた際の如きも、坂本天
神といふ社に、菅公の、
『心だに誠の道にかなひなば、

二宮尊徳翁 (報徳二宮神社所蔵)



祈らずとても神や守らん』

の歌を認め、その裏に、

我が前を千日去らず祈るとも

心邪なれば罰を與へん

と認めた奉納額を納めてをるのであります。

又同年九月の日記を見ますと、

廿九日西物井村金兵衛鳩ヶ谷町へ飛脚

遣候

おぼえ

一金四兩貳歩

右者人(の)ため(世の爲)長崎迄御

出立之段太義(に)候、おん頼申儀

は、十月三日様より来る六月登山迄、

一日様に銀壹兩つつ御ほどこし可被下

候以上

九月廿九日

二宮より

三志方へ

歌

二と三と一つたがへと軒ならび

旭の御修行は友に拜さん

之れも人の話だが、最初は大金の懸賞

をかけて捕獲しやうとしたものださう

だが、とう／＼捕らなかつたらしい。

今では大分子が繁殖したと見えて、山

の奥、森の中、時には庭の枇杷の木な

どで、びつくりするやうな高い聲で、

「一寸来い／＼」と鳴く。私は此の鳥

の聲をきくと、妙にいろ／＼なことが

考へられてならぬ。

阿彌陀經といふお經の中には、極樂

にゐる鳥の聲のことが書いてある。そ

して其の國の人民は鳥の聲をきくと、

皆ことごとく、念佛、念法、念僧の心

を起すといふことである。

極樂ならぬ穢土の人民である吾々

は、此の「一寸来い」といふ鳥の聲を

聞いて、皆ことごとくどんな心を起す

だらう。

所謂塵に傷もつ人間は、「一寸来い」

といはれて、ハツと心に驚くのではあ

とあるところから見ますと、先生はその頃不二講をさへ熱心に信仰されてをられたやうであります。

二

話は脇道へ外れたやうであります、右のやうなわけで、先生は日頃から非常に信仰に篤い方だつたのであります。

ところが今度の事件に出あひまして、先生の信仰は俄然白熱化したのであります。

江戸御府内諸々方々の神社佛閣へ参詣した。しかし先生は心の落付場所を発見出来なかつたのであります。

そこで先生は側近の誰にも洩らすことなく、たゞ獨り下總の成田山新勝寺へやつて來られたのであります。

どなたも御承知の通り、成田山新勝寺の御本尊は不動尊であります。先生はこの不動尊の實前に、二十一日間の斷食祈誓をこらしてわが至誠の存するところを身命を賭して試みようとさ

れたのであります。

この時の先生の決心は、「たとひ猛火背を焼くともこの場を動かじ」といふ悲愴な決心を示してをるのであります。

二十一日間の斷食祈誓は無事果され、先生は四月八日に無事櫻町の陣屋へ歸任されたのであります。が、この二十一日間の斷食修行中先生は果して何ものを體得されたのでありませうか。

『報徳記』の中にはこの間の消息を次のやうに記してあるのであります。

于時某年某月先生歎じて曰、予君の委任を受此地に至るより以來心力を勞し此邑を興し此民を安んぜんとして舊復の道を行ふこと既に數年、道理に於ては必定舊復疑ひなしといへども奸民之を妨げ且我と事を共にする所の吏も亦各偏執疑惑を生じ終に讒訴に及べり、内には我が事を傷ふの妨あり外には佞奸の民之と興して我が事業を破るの憂あり、此の如くして三邑を興復せんこと其期を計る可ず、嗚呼我能はずとして退か

るまいか。或は友人と何かのプランを畫策中のものは、「一寸來い」といはれて、思はず心にときめきを覚えはしないだらうか、何れにせよ、其の人その人の立場によつて、様々な思ひを呼び起すことだらう。

○

田舎の極く純朴な農夫、働くより外に何も知らぬ人、そして文字通り一文不知の人達になると、近代文化の頭計り大きい片輪ものよりか遙かに恵まれてゐるものが少くない。私の惡意な農夫に、背戸の由さんがある。

もうずつと前のこと、初秋の頃だつたが、白晝日蝕の現象が起つた事がある。學校へいつてゐる子供達は有り合せのガラス板へ墨を塗つて、此の現象を見てゐるものもあつた。天日は次第に暗くなつて、四邊蒼然となつて來た。由さんは日蝕なぞといふことは全然知

んことは易しと雖も君命を廢するを如何せん、顧に我が誠意の未だ至らざる所なり、苟も誠心の至るに及んでは天下何事か成就せざらんや。

といつて成田山不動尊へ走つたと傳へてをるのであります。

この話は『報徳記』の著者富田高慶翁が先生から直接承はつたところでございますと但書を付けて傳へてをるところでありますから信じてよい言葉であります。

恐らくは察するに、先生はこの間にあつて人間以上の力がこの天地の間に彌漫してをることを悟られたのでありませう。

『道理に於て必定疑ひなし』と信じた櫻町復興の途が行詰つてしまつた。それには外部的な事情がいろいろと存在するけれども、つきつめて見れば『我が誠意の未だ至らざる所なり』——言葉を代へていへば、人間の智恵や能力といふものは如何にも小さいものである。われらは天地全體を生かしてをる大きな生命の力に生かさ

れることなしには如何なる仕事もなし得るものではないといふことを悟られたのであります。又別のところで次のやうにも語つてをられるのであります。

○翁床の傍に、不動佛の像を掛らる、山内董正曰、卿不動を信ずるか、翁曰、予壯年、小田原侯の命を受て、野州物井に来る、人民離散土地荒蕪、如何ともすべからず、仍て功の成否に關せず、生涯此處を動かじと決定す、假令事故出来、背に火の燃付が如きに立到るとも、決して動かじと死を以て誓ふ、然るに不動尊は、動かざれば尊しと訓ず、予其名義と、猛火背を焚くといへども、動かざるの像形とを信じ、此像を掛けて、其意を妻子に示す、不動佛、何等の功驗あるを知らずといへども、予が今日に到るは、不動心の堅固一つにあり、仍て今日も猶此像を掛て、妻子に其意を示すなり。

(二宮翁夜話卷之二の五十)

不動心——言葉を代へていへば誠であります

らない。驚いて畑からかへつて来て、庭に干し連ねた洗濯ものを懸命にとり込み始めた、「オーイ、夕立が来るぞう」由さんは、白晝暗くなるのは夕立が来ることとしか思はない。

他の人達もあつけにとられてゐたが、やつぱりなかなしに其の氣分に誘はれると見えて、一緒に洗濯ものをとり込み始めた。だが無論雨の降るわけはなかつた。之れは一場の笑ひ話に了つたことだつたが、然し其の時、私は此の由さんの「無知」に對してどうしても笑へない何物かあつた。

昔の名人が、小手先の器用さを嫌つて、むしろ其の危さを避けて平安の大道をゆく姿がかうした無知な純朴な人達にどこか似通ふところがある。

○

近代文明の所産である智的生活は、とかく一知半解の片輪に陥り易いうら

す。天地大自然の動かざる如く、誠は決して動かない。その反対に人間の心は動き易い、動き易い人間をして不動確乎のものたらしめるものは信仰たゞ一つあるのみであります。

三

二宮先生の實感には實にこの確乎不動のもとに直參することによつて、自分を生し、他の多くの人々を正しく生かしたいといふ烈々火の如き信仰にあつたのであります。

自分を生かすといふことは、言葉を代へていへば、自分は常にわれならざるものゝ力によつて生かされてゐるといふ實感であります。

自分は生きてゐるのだといふ實感には實に弱いのでありまして、自分はわれならざるものに常に生かされてゐるのだぞといふ實感こそ却つて人間をほんとうに強くするものであります。

自力は挫け易いが、他力こそ最後に至つてほんとうに強い力を人間に與へてくれるものであるといふことは本當のことです。

では二宮先生を絶えず生し、二宮先生に對して常に強い力を供給したものはなんでありませうか。

それは天地を貫く父母の恩、君の恩、國の恩、天地全體の恩でありました。

先生程強く恩の實感に生かされた人はないのであります。先生は常に心の中でこの恩を拜み、わが身を殺してこの恩に事へられたのであります。

先生の教へを一口に『報徳の教へ』といふのであります。世間ではこの教へを恰も經濟史生のスローガンの如く考へてをるのでありますがそれは非常な誤りであります。

二宮先生の實感には、寧ろ信仰生活に他ならなかつたのであります。すべての勞働生活は、天地の大恩に報いるための報徳行、盡しても盡しても盡し足りない感謝感恩のおわびの生活だつたのであります。その結果、勤儉力行となつては貧乏から脱れることが出來、他讓奉仕の生活となつて現れては子孫繁榮の基を開くことにな

みがある。

小手先の器用さは一時の喝采を博するに足りる。けれども愚にゐる平安さは無い、愚といつても然しながらそれは、智に對していふ愚よりも、自然——天意——といふ意味の愚である。

○

人生は、之れを直線にわたる人と、曲線に廻つてゆく者とがあるやうだ。直線でも曲線でも最後のゴールは勿論一つ處である。

力の弱いもの、愚なるもの、皆直線組である。

ひたむきの信心者なぞ、今日ではとかく愚夫愚婦といはれる場合がある。然し、愚夫愚婦であればこそ、そしてひたむきな信心者であればこそ、彼らには、彼らを嗤ふものゝ知らない平安さがある、家庭の溫良さがある、人情美しき純朴さがある。

つたのであります。

私達の生活をよりよいものにするものは、感謝報恩の生活より他にない。それが信仰生活であり宗教生活であり、この他に信仰生活も宗教生活もあり得ないといふことを先生はあらゆる方面から行詰つてしまつた天保時代にあつて主張もし、率先して實行もされたのであります。

ある時私の許へ農村を現に指導されてをる方がまゐりまして、二宮先生の思想はどういふところが優れてをるのかと問はれましたので私は次のやうに答へたのであります。

「私は學者ではないから學問上のことはよく知らないのですが、こゝにかういふ先生の歌があるのです。」

といつて次の歌を示しました。

きのふより知らぬあしたのなつかしや

元の父母ましませばこそ

「——私は先生についてはこの一首の歌を味ふことによつてやがては先生のすべてを知り盡したといへる日が来るのではないかと思ふのであ

ります。」と申しましたらその方は、

「先生にかういふ歌があらうとは存じませんでした。これから後先生についてとやかくの批評をいふことは止めませう。」といはれました。

經濟生活は信仰生活と固く結び付かなくては正しい筋道が立たないのであります。

それと同時に信仰生活は直ちにお金の正しい取り扱ひ方や、夫婦の仲がしつくり溶け合つたり、人との交際がよくなるやうに、その働きを發揮せねばほんとうに生きた信仰とはいへないのであります。

私達は二宮先生の生活を知ることについて、經濟と信仰とが一體不二のものとして完全に生かされてをる道を見出すことが出来るのであります。

二宮先生の信仰の中には、神と物とが一如一體になつた不思議な世界が描き出されてをるのであります。味へば味ふ程『報徳の教へ』程深く廣い教へはないのであります。(をはり)

愚夫愚婦を嘲つた彼らには、その嘲笑の小知のために、かへつて其の身を焼く焦心と家庭の不和と、反目嫉視とがある。

○

淨土門は直線といはうか、然らば聖道門は曲線といふべきであらう。

葉末にまろぶ一點の水滴にだに、水なればこそ月影を宿し、燦然として玉をあざむく。

傷あればこそ風がしみる。

腫に傷もつ身なればこそ「一寸來い」に心驚く。

「一寸來い」

名は知らねども、名鳥よ、汝の聲を聞いて、此の穢土の人民にもせめて信心の心を起すやうに……。



あれか—これか

室 伏 高 信

私はこの頃「青年の書」といふものを書いて見たいと思つてゐる。私がこの書物の冒頭にもつて来ようと思つてゐるのが、キエルケゴオルの「あれか—これか」(Entweder-Oder) といふ言葉である。

この言葉の意味はキエルケゴオルにとつては一つの決定を意味する。これは無性格への審判であり、「或る程度まで」への論告であり、またこれは絶対への入口を示したものである。私がこの言葉を日本の青年に贈らうとするのもこの意味にはかならないことはもとよりである。けれどもまたこれとともに、この「あれか—これか」がこの不安の時代を意味し、わけても青年たちがこの不安の空氣のうちにあつてその爲すところを知らないでゐると思はれるからである。

ひとり青年だけではない。この時代そのものが不安に属する。ニイチエはこれを虚無の時代と呼んだ。キエルケゴオルはこれを「或る程度まで」の時代と呼んだ。カアライルが否定の時代と呼んだこ

大衆俳壇

萩原古萩選

○ 市橋 義一
山裾の霞にとけり春の鐘

○ 内海 一音
伸く日向のかぬぞ冬の蟬

○ 小山 文二
春めきぬ動物園のつるの聲

○ 天明福三郎
春や浅きさゞれさゝやく流哉

○ 天明福三郎
きら／＼と流の線や春ふかし

○ 藤井 月市
研き牙た月の夜半也下駄の音

○ 關谷 秀峰
菜の花の霞むあたりや笠二つ

○ 關谷 秀峰
あとやさき蝶も伴らし寺参り

○ 久保田 譲
雪映の富士や魏々たり悠々たり

とも著名なことである。

私はこゝにこの時代の性格を見る。キエルケゴオルや、カアライルやニイチエの時に比べると、今日はこの點が一層に顯著である。彼等の時代はまだ一個の進歩的な時代であつた。その時代は信仰の失はれたものであつたには違ひない。けれども神の信仰の代りに新しい科學への信仰があつた。神の都が崩壊して工業都市が世界の到るところに新しい希望をもつて立ちはじめた。人は一つのことを失つて他の一つのものえようとしてゐたのである。ところが今日は事情は一變して來た。今日の謂ふところの懷疑とは神へのそれではなくて、科學へのそれである。神が否定され、科學が懷疑の雲に包まれ、この文明そのものが疑惑のうちにおかれてゐる。總じて進歩への信仰が失はれ、人は酩酊した百姓のごとくに、右によろめき、左によろめき、そしてその行くところを知らないである。これが今日の時代である。「壁に頭をぶつけた男」とシエストフはいつてゐる。「壁に頭をぶつけた男」のやうに、現代人は行きつまり、絶望の極において、その爲すところを知らないのである。

だが、この瞬間である「あれか——これか。」人がその何れかを撰まなければならないのは。絶望は必ずしも絶望ではない。逆境に意味を與へるのが天才であると、カイザリンクはいつてゐる。この種の時代こそ天才の時代といつてもよい。「その時近し」とキリストのいつたのもこのやうな時代を見てゐたのであらうと思ふ。

私はこの時代——この絶望の時代に大きな望を囑してゐるものである。これは轉倒の時である。大いなる轉倒の時である。「あれか——これか。」人はいまや決定の前におかれてゐる。その前夜の時だといつてよいのである。

(おはり)

○ 久保田 讓
獨居て茶の味もよし秋の暮

○ 三野 輪香雪
雪解や枯紫蘇つくく鳥一羽

○ 西坂 早苗
梅白き軒の御旗や紀元節

○ 我妻 千水
梅は咲小鳥啼くとも明家かな

○ 吉野 法泉
參道の雪掃て居る嫺かな

○ 小松 貞夫
讀初や母にひもとく淨土教

○ 小松 貞夫
漕着る島はつばきの盛りかな

○ 關野 寒村
夕刊やつる吹雪の最中さへ

○ 丹羽 徑子
節分や鬼おそろしき雪の夜

○ 柚木 美雪
大雪や宗吾の夢を炬燵かな

○ 相原 逸作
念佛の門をなかして凍る風



淨

土

儼

然

前 田 聽 瑞

一、無上甚深の第一義 『阿彌陀經』に於ては劈頭まづ端的に無

上甚深の第一義、西方極樂淨土のことが説かれてあります。どんな經典であつても、その第一義とする點が、今日の人に取つては恰もお月さまの世界のことのやうに寫るのであります。現實に即しない仙人の社會を物語るものとしか見えないのであります。

阿彌陀佛と申すばかりをつとめて

淨土の莊嚴見るぞうれしき

實に高く、尊い人格のほの見える歌であります。この歌の主は申すまでもなくわが法然上人であります。古くから「大師は弘法にとられ元祖は法然に取られ」と言はれてゐる通り、法然上人は日本に於ける念佛の元祖であります。すべての佛教を南無阿彌陀佛で統一

してしまつたほどの最大最偉の宗教的巨聖であります。

畏くも生前既に三代の帝王の戒師となり、「ワガ大師釋尊ハ法然上人ナリ」とまで直弟鎮西上人から渴仰された深さの知れない法然上人であります。この大宗教家法然上人が「西に向け、彼處に汝の樂土がある。彼處に汝の親がある。彼處をのぞんで親の名を呼んで見よ、どうして救はれずにあるものか。」と聲々彌陀の慈悲に溢れ、彌陀法王の權化、專修念佛の導師として、世人崇仰の前に立ち、一化八十年、口稱念佛の高調に始終し給ふたのであります。法然上人にとつては西方極樂淨土は實に嚴肅なる實在であつたのであります。

二、宗教を理解するの態度・方法 西方極樂淨土は果して實在するか。私はこの問題に對して十分に考へる時間を持たないし、又私

は元來かゝる問題をあげつらふことを好まないから、唯かゝる宗教信仰の對象を理解するの態度について一言することに止めて置きたいと思ひます。

元來私たちは物を知る場合、物の性質に従つてこれを認識する態度なり方法の上に自ら制限を蒙るのであります。例へば繪畫彫刻の美を理解するには耳ではその用をなさない。眼を以てせねばなりませぬ。又音樂の妙趣は眼を以て理解することは出来ぬ。耳を以てせねばならない。そのやうに宗教信仰の對象は感覺や智力だけでは理解することは出来ない。宗教のことはどうしても信仰を以てせねばならない。それは智力を超越したる西方淨土の性質に依つて自らしかく制限を蒙るのであります。

月かげのいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ (法然上人 道詠)

月光は皎々又皎々、あらゆる萬象を照破してゐても、眼を閉せば月もかくれる。眼を開けば月は天心にあつて皎々と照り輝いてゐる。西方淨土がないといふのもこれと同様。西方淨土を如實に知見する智慧の眼が開けないからであります。例へば電波は空中に常に動いてゐる。しかし、これを受くべき装置がない時は少しもこれを感ずることは出来ない。敢へて申し上げます。信仰の裝置さへ整備せば西方淨土は直ちに現前するのであります。淨土儼然を理解し感得するの途は信仰以外にはないと確信するものであります。「信は道の

元、功德の母たり。信は微妙甚深の法を解す。」と「華嚴經」(第六、賢首菩薩品)にも記してある。たしかに頂門の一針であります。

三、指方立相の教義 さて、西方淨土は古今の先德によつて、ひ

たすら仰ぎ慕はれて來たところであり、殊に唐の善導大師やわが祖法然上人などを通して憲章し發揚されて來たところで、純正淨土教に於ては實に教義の中心をなすものと言つてよいのであります。

凡そ佛敎學に於ける淨土の見方は極めて多様であり多彩であります。が、姑らく西方淨土といふこと、直接深い關係にある淨土の見方を分別すると、略々三通りに纏めることが出来やうかと思ひます。

第一は淨土は本來無東西であるといふ見方、第二は東西南北四維上下、十方悉く淨土であるといふ見方、第三は淨土は儼然西方にあるといふ見方であります。この三つの見方は共に眞實、靈妙なるものがあります。我等は西方淨土觀に於て更に靈且妙なるものがあるとして存するを、痛感するものであります。

以上、三つの淨土觀は齊しく眞實靈妙であるとして、然らばわが淨土教は何故特に西方淨土を説き、指方立相の教條を高調するのであるか。序ながら、指方立相とは方(方位)を指し、相(相狀)を立てるといふこと、言ひ換へれば淨土の方位を西方と指定し、聖なる莊嚴の相狀を建立するといふ意味であつて、つまり西方淨土といふことであります。それで、まづ第一の淨土觀、本來無東西の無方無相の淨土、方位なく形態なき淨土といったやうな高遠深妙な見方は

佛にして初めて體得しうる謂は、唯佛與佛の境地であります。次に第二の淨土觀でありますが、それは方位あるも無きが如き十方悉く淨土であるといふ見方で、かゝる高尙な自由な見方は、餘程心智の開けた聖者にして能く諦達し得る世界であります。「人間にすみし程こそ淨土なれ、悟りて見れば方角もなし。」誦し來れば、こゝにも無論深い眞實がありますが、しかし私たち一般大衆にあつては方位の定まつた形態ある所謂指方立相の淨土でなくては眼安がつかないのであります。私たちのやうな凡夫にも思念し憶念され、慕ひ悔がれ得る淨土は何といつても西方のお淨土でなくてはならないのであります。十方の淨土を欣び求め、あらゆる佛を拜むといふことは空虛であります。十方に淨土は多いが、特に西方の如來、有縁の阿彌陀佛にとり纏るといふところに力強い宗教となるのであります。生氣發刺たる信仰は實に有縁の一佛を仰信しその淨土を願生するところに成立するものであります。

四、大悲無窮

「やみ晴れて心の空に澄む月は、西の山邊や近く

なるらん。」これは歌聖西行法師の歌でありますが、天眞流露彫琢を假らずして、所謂欣求淨土の眞心が三十一文字の間に躍動してゐるやうに思はれます。しかし、かゝる歌聖の心はとも角、一般大衆にはともすれば淨土の存在といったやうなことが問題にされがちであります。人の心は古今の別はないと見えまして、東魏の孝靜帝は西方淨土の存在理由を時の高僧曇鸞大師に質問されたといふことが、

『安樂集』(道綽禪師撰)の中に記されてあります。これはもう千三百年も昔の話であります。この昔話の大概、問答往來の要領が親鸞聖人の靈筆を驅つて和讃となつて居ります。

世俗の君子幸臨し、勅して淨土のゆへを問ふ。十方佛國淨土なり、なにによりてか西にある。

鸞師答へてのたまはく、わが身は智慧淺くして、いまだ地位に入らざれば、念力ひとしく及ばれず。

この和讃を誦する時、ひたすら慈教の切なることを感じ、西方の淨土といふものが、特に身に沁みて領受せらるゝのであります。理論の上から申せば十方淨土も無論眞實でありませうが、さて宗教的實踐といふことになつてくると、私どものやうな下根な凡夫、念力や認識の範圍の限られてゐる一般大衆にとつては、十方淨土といったやうな高談は、所謂猫に小判の類で、全く無意味であり、無用であり、無力であります。猫には小判よりは鰯節の方が餘程有難い。それと同じで、吾々凡夫の分齊では、十方は悉く淨土であると言ひ放たれては、茫然自失全くなすところを知らない譯で、何處へ行くべきか、所詮迷ひ子である私どもは二重三重に迷はねばならないことになります。雜踏の中で母親を見失つた迷ひ兒も同様であります。この意味に於て指方立相のお淨土、方位は西方と指定されてあり、處は七寶合成の聖なる勝境であるといふ經説が特に尊いもの、實に身に餘る大悲の教であると領解されてくるのであります。され

ばこそ、善導大師はこの指方立相について、特に古今楷定の御訓諭を垂れられました。

唯方を指し相を立て、心を住めて境を取らしむ。總て無想離念を明さず。如來懸に知り給ふ。末代罪濁の凡夫の相を立て、心を住す、ら尙得ること能はじ。」(觀經疏・定善義)

一切の佛土皆嚴淨なれども凡夫の亂想恐くは生じ難し。如來別して西方の國を指す。」(法事讃卷下)

已に窮理の聖となりて、眞に徧空の威あり。西に在りて時に小を現す。但是れ暫らく機に隨ふ。(往生禮讃・晨朝偈)

かうした御言葉を一々噛みしめてみる時、坐ろに如來の大慈悲、

きはみなき聖愛のめぐみに感激せずには居られないのであります。

更に今一つ、善導大師は次のやうに申されました。

「直ちに西方を指して餘の九域を簡ふ。」(觀經疏・定善義)

何故とならば、

「是を以て身を一にし、廻向を一にし、處を一にし、境界を一にし相續を一にし、歸依を一にし、正念を一にする。」がためである。

と懇親篤切、私たちを御指導下さいました。

「心は猿猴の如く、五欲の樹に遊んで、暫らくも住まらず。」とは

『心地觀經』の言葉であります。何と申しまして、人生は愛欲であります。

人間の生活の暗さの中心をなすものは愛欲であります。愛欲は妄念を生み、妄念は罪を造り惡業を作りがちであります。人間

である限り、妄念妄想の起らざる日とてはないのであります。

一代の高僧法然上人でさへ「煩惱具足の凡夫、いかでか妄念をとどむべき。その條は源空も力及び候はず」(勅傳第十六)と御述懐になつてゐる程であります。かく心の亂れがちな私たちであります。かゝる亂想の私たち凡夫のために特に「在レ西時現レ小」のお淨土、西方極樂淨土をお構へ下されたところに、如來の大悲無窮を拜受し信樂するところがなくてはならぬと思ひます。所謂凡入報土、即ち凡夫を彌陀の淨土に生れしめるところに純正淨土教の特徴があり、法然上人の立教開宗も亦實にこの一點にかゝつてゐると言つてもよろしいのであります。

五、西に在りて時に小を現す 然し、こゝでくれぐれも注意した

いことは、西方淨土は阿彌陀佛の大願業力の成すところ、言ひ換へれば彌陀の清白なる世に變びなき大願心、大慈悲心の上に成るものであります。西方淨土は彌陀を離れてのお淨土ではないのであります。阿彌陀佛のことは、他日佛祖より與へらるゝ機會を俟つことゝ致しますが、一言以て之を蔽へば壽命無量、光明無量といふことになります。壽命無量、永遠の生命は人間の熾烈な欲求であり、理想であります。光明無量、光明といふものは世界の一つの理想であります。永遠の生命、無限の光明、これは吾人の最高の理想であります。この人類最高の二大理想の具現者が取りも直さず阿彌陀佛であります。この光壽無量の覺體から十方攝化の大慈悲が燃え出で、こゝ

に西方淨土の大建設となつたのであります。それで、實を申せば淨土の内容は『無量壽經』に所謂「恢廓曠蕩」として限極すべからざる」底のものでありますが、但暫らく亂想寄記するに由無き凡夫のため、如來大慈悲を捨てず、直ちに無量より有量を起し、無邊より有量を立て、無限より有限を生じ、大より小を現じ、別して西方の國と指し給ふたに過ぎないのであります。所謂「在西方現小」(西に在りて時に小を現す)の淨土でありますから、有量の中に無量を見、西方の中に十方を見ることを忘れてはならないのであります。かく領解し信受して専ら念佛することが、眞に彌陀に歸向する所以であり、又わが淨土宗の指方立相の聖旨を信受する所以であると思ふ次第であります。この阿彌陀佛の大慈悲をいたゞき、指方立相の聖旨を思惟し正受する時、西といふ方向、聖なる莊嚴淨土には深遠微妙の大義が秘められてゐることが、漸次氣附かれてまゐります。それゆゑ、法然上人の御訓にも特に「十方に淨土多けれど西方を願ふは十惡五逆の衆生の生まるゝ故なり」(小消息)と仰せられてあつて、こゝに深い御心のほどが含まれて居るのであります。

六、懷しき慕はしき熊谷蓮生坊 終りに私は懷しき慕はしき念佛

の行者熊谷蓮生坊の逸事を述べてこの小文を結びたいと存じます。

今から七百五十年程前、東海道筋を鞍をさかさまに置かせ、馬にも逆まに乗り、手には念珠をかけ、口には常に六字の名號を稱へつつ下向する大入道があつた。この入道こそは申すまでもなく蓮生坊

熊谷次郎實であります。この風變りの「逆馬乗り」には路往く人は思はず目を聳てました。しかし往來の人々には熊谷入道の「逆馬乗り」の心が讀めない。唯あつけにとられて、あれよくと笑ひ迎へ嘲り送るものばかりでありました。しかし熊谷の「逆馬乗り」は決して酔興でもなく、いたづらでもない。それは彼が如來に額づき、西方淨土を欣ぶ心の客觀的な表現なのであります。「行住坐臥、西方を背にせず」との聖訓を身で讀んだ尊い姿であります。そして歌を詠んで云ふことには、

淨土にも剛の者とや沙汰すらん

西に向ひてうしろ見せねば

日本一の剛の者と謳はれた丈けあつて、すること、なす事が凡俗でない。行住坐臥不背西方、西方淨土を背せずに念佛する人こそ、本當に剛の者であると稱してよい。まことに熊谷蓮生坊の如き人こそ正眞の指方立相の行者、至妙の純正淨土教徒であると思ひます。

「やむにやまれぬ大和魂」といふ言葉もありますが、實に止むにやまれぬ感激に依つて、自らを如來にまかせ切つて、驕地に進み行く「不背西方の行者」の心根は實に懷しく慕はしいものであります。法を語ることは、他に教ふるにあらず自身に聞かしむることである。私はこの小文を草することによつて愈々厚き教養を蒙つた有難さを念報せずには居られないのであります。(おはり)

雪の表情

青 柳 優

雪にはいろいろな表情がある。薄墨色の雪、紺青色の雪、蒼薇色の雪、冷たい雪、温かい雪。色彩や感觸に變化があるやうに、雪はその季節々々の性格を端々たる白一色の表面に湛えて、いつも何か重疊たる陰影を宿してゐる。

歳の半分程も雪を見ながら暮す北國の人にとつては、雪は退屈な一色ではなく、時々季節や天候によつて性格づけられた複雑な表情の持ち主である。人々は長い慣習によつて、物靜かな、また時には氣まぐれで兇暴な雪の表情を敏感に讀みとるのである。それは丁度、漁師達が青一色の海の

表情を幾様にも讀み分けるのと同様である。

スキーヤーは雪の質に對して敏感であるが、それはたゞ滑るための、言はゞ狭い範圍に於ての關係に限られてゐる。ところが雪國の人々は、收穫や種蒔きの用意や、言はゞ一年中の生活の全體において雪と交渉をもつてゐる。私達には雪國の人々の重厚な性格や顔の表情は、あれは、そのまゝ雪の表情であると思はれる。鈍さと激しさがそのなかに有る。

いつぞや帝都を吹き荒れた雪に就いて、翌日の新聞は「白魔跳梁」といふやうな看

出しで報道してゐたが私にはそんな看出しが、實に白々しいものに思はれてならなかつた。東京では何十年ぶりといふ程の珍らしい吹雪の咆哮を終夜聞き続け、翌朝食卓に配られる新聞を見ると、もう「白魔跳梁」などとおよそ實相とは縁遠い感覺で無慈悲に一轄されて了つてゐる。何といふ底の淺い觀念操作、深味のない言葉の羅列であらうか。都會に住むことがつくづく厭になるのはこんな時である。文化生活の觸手をもつて任じてゐるジャーナリストとは、いつも編輯室の机の上で思ひ付いたやうな看出しをつけてひとり悦に入つてゐるやうに思はれてならない。其處では眞實は惡く歪められ、そして新聞記事は新しい事件を報道するためにではなく、新しい事件を觸發し創造するために書かれる。今までに悪しき流行を作り出した新聞の罪禍には限りがないと言へやう。筆が横道へ外れた。

曉方の雪は薄墨色である。夜來の雪がすつかり熄んで、曉の光が雪の上から這ひ

上つてくる。遠くのエ、村の家々が黒くくつきりと見え、軒下に動いてゐる犬までが判つきり見えるほど明るく静謐な世界であるのに、曉闇が雪肌の上を薄つすらと流れてゐる。田舎の家では、こんな朝の早起きは楽しいものである。長い濡縁を素足で雨戸を繰り、庭下駄を穿いて表門を開けにゆく。何處かで咳の音がする。雪は踏めばキユウ／＼と鳴る粉雪がいく。水墨で描いた雪景色は、すべて私には曉闇を吸つた早朝の景色に見えてならない。

重たい雪が山の中腹まで下りて来て、幾日も低迷したまゝ動かない。北風ばかりが激しく吹き、ひり／＼と膚を荒し、終日、雑木林を揺ぶり、背戸に掛けた干菓を騒がせる日が續くと、或日びたりと風が熄み、気温がぐん／＼降つて、夕方には同震ひのする底冷えがやつてくる、人々は幾夜も聞き馴れた風の騒音の途絶えた、へんに落着きのない夜を早くから寝につくのである。また耳の中に木枯の騒めきが聞へるやうで

頭が冴えるばかりである。そんな夜に限つて遠くのエに火事がある。半鐘が寒々と響いてくる。

次の朝は決つて知らぬ間に眞白に初雪が降りてゐる。冬はこつそりと夜分に來て初雪を置いてゆくのであらう。山國の初雪は毎年こうしてやつて來る。山腹に蟠つてゐた雲は幾日も山肌を冷やされて雪になつたのであらう。初雪の朝はすつかり山から空まで晴れ渡り、日はチカ／＼と清冽な雪に反射し、早朝から閑な雪解の音をたてゝゐる。雪に埋れて冬を送る山國の人々の心にも、初雪ばかりは、少しも陰鬱な翳を印さないのは、それがつゝましやかにやつて來て、あつさりと消えてゆくからであらう。

それがひと雪ごとに陰險さを加えてくる。息もつけない程の風を交へて冷たく手足を打ち、顔にへばりつき、解けてふところに流れこむ性惡の霰雪は、夕方からは氷雪になり、樹の枝を包み、氷柱を垂し、植

林地の若杉を折り、庭木を裂くのである。私たちは未明に起きて雪靴を穿いて、竹棹で庭木に積つたがち／＼に凍つて氷塊のやうになつた雪を揺ぶり、たゞき落して歩いたものである。

凍てついた街道をどこまでも轉つてゆき畑の畦に一つ一つ吹き溜りを作つてゆく粉雪の日などは、殊の他、人々を不氣嫌に黙らせる。村人同志道で逢つてさへ、碌に言葉も交さないのである。空氣はかさ／＼に濁き、桑畑は麻苧のやうに震える、このやうな酷薄な氣候の中では、人々はすべてに抗つて、また自分自身に對してさへ齒を刺して生きてゆくのであらう、お互に探るやうな眼でうかゞひながら外の方を向いて遠り抜けてゆく。そんなとき人々の顔を覆つてゐるのは凍えて硬つた雪の表情である。

私たちの記憶では、遠くのエ都會からこの村へ、なにか惡者が入り込んだといつて、緊張した駐在の巡查の黒服が、桑畑の彼方の街道をうろ／＼するのは、大抵こんな天

候の日のことであつたやうである。

山國の吹雪は大抵このやうな天候の續いた後にやつてくる。執拗な風と粉雪があらゆる地熱を吸ひ盡して了つて、もうこの世には、温味をもつた何もなくなつて了ふと粉雪は兇暴な吹雪に變つて来る。戸の隙間から捲ち込み、家々を揺ぶり、わづかに残つた人々の體温をも劫掠しやうと襲ひかゝつてくる。こんなとき吹雪の中へ出て行く人の格好は滑稽に見える、吹雪に體を振ちられて一瞬、頭の中が空っぽになり方向を失つて飛んでもない方角にむかつて歩き出すのである。

赤い焚火の圍爐裏をかこんでの雪の夜語りには是非、吹雪の伴奏が必要であるのは、氣節の景物としてではなく、酷薄な冷たさを半面に意識してみた、お互に素直に頷き合ふ團樂の温かさが湧くからである。言はれ吹雪は、人々の心の中に吹き荒れる限らない邪心の深淵を意識させる。そしてそれへの限りない自己嫌厭のために人々は一層

知らず知らずに、現身の虚弱な頼りなさを護り、温め合はふとして赤い火に手をかざし、一層饒舌になるのである。

だが吹雪が幾日も續くと、お互の會話の中に段々と温味が消えてゆき、話はずはぐに食ひ違ひ、白々しく牙え返つた人々の心の齟齬に吹雪の意地悪い嘲笑が慄然と吹き込んでくるといふ。昔讀んだロシアの小説のなかに、こんな時、急に誰か譯の判らぬことを罵りながら戸口へ飛んでゆき、皆でその男を押へ付けてゐないと、吹雪の荒野に消えて行つて了ふ。といふやうなことが書いてあつた、だが私には、人間の温情をこのやうな兇暴な絶望に驅り立てゝゆくのは、戸外を吹雪く自然の暴力ではなく、人々の内心を滅裂に虐む世紀末の社會思潮の吹雪ではなかつたかと思はれる。

私の知つてゐる、山小屋の番人の話によると、彼は毎年山小屋で越年するのであるが、嚴寒の夜など山の樅や楷の立ち木がボン々和不氣味な音をたてゝ凍み割れるさ

うである。そしてそんな夜は戸口が何處も開いたり閉ちたりする様な氣がするといふ。何かもうこれ以上は堪らないといふやうな氣がして夜を明すのだが、雪は不氣味で怖いですよ。と言つてゐた。雪女郎などいふ傳説もこのやうな實感から生れて來たのではないかと私には思はれる。

雪の表情や性格には限りがないが、最も感銘の深かつたのは、四月末曾路から仰いだ御嶽山の紅色の雪である。街道の落葉松はまだ冬のまゝであつたし、櫟の枝には柞蠶の青繭が寒風に震えてゐるのに、嶽の雪が薄紅色に青空を彩つてゐた。それは朝日や夕日の加減ではなく、陽は中天に輝いてゐた。

燦々と降り注ぐ陽の下で見る雪野原は黄色であり、峠路で見る殘雪は剃刀の剃痕の色であり、青さである。また七月日本アルプスのお花畑の背景に見る雪溪の雪は紺青のミヤマ桔梗の色であつた。雪にも個性があるうに思はれる。

大衆
小説

道

みち

梶野 千萬騎
玉井 徳太郎 畫



「駄目だ！」

逃げるやうに、亭は、道場を飛び出した。美しい少年の顔は蒼腿め、その目は凄じい色に燃えてゐた。

寛政九年正月の夕暮だつた。昏い天地を覆うて、粉雪が舞ひ狂つてゐた。ゴーツと町の屋並を、裸木を鳴らして来る風は、亭の袴の裾を吹きあげ、バリ／＼と傘をあふつて十五歳にしては小柄な彼の身體を、散々に蹴弄した。しかし、亭は寒氣も感じなかつた。雪も目に映らなかつた。

「無念だ！ 莫迦奴！ 未熟者奴！ 七年間の修業は、一體、何の爲だつたのだ！ 満座の中で、あんな瘦腕に打ち捲られるとはなんたることだ！ あゝ……」

聲をあげて泣きたくなつた。そのまゝ泥濘の中に身を投げて、滅茶々にころげ廻つたら……誰でもいい、来る奴を片ツ端しから斬つてくれたら……そんな狂暴な衝動に襲はれた。

「よく降るのう」

雪の中を錆のある太い聲で獨語しながら近付いて来る男があつた。すれちがひながらヒョイと立停つたその男は、憑かれたやうに歩いて行く亭の後姿に、ぢーいつと目を据えた。五十がらみのたくましい士だつた。と、何思つたか、ツカ／＼と寄つて行くなり、

「とーッ！」

凄じい氣合だつた。亭の傘が飛んだ。氣合にはじき飛ばされたやうに、振り向くまもなく二、三間前のめりに泳いだ亭はやつと踏み止まると、

「ブ、無禮者！」

刀を拂つて必死に見構へた。雪のために相手の輪廓はぼんやりしてゐた。といふより今の亭には相手の姿を見定める餘裕がないのだつた。

「斬るぞ！」

刀の柄に手をかけたまゝ、士は威嚇するやうに喚いた。同時に亭は何か叫びながら一氣に踏み込んだ。ガツと大地に刀が鳴つた。亭はそのまゝ泥濘の中につんのめつてしまつた。

「蛙の眞似か。はゝゝゝゝ」

「うぬ！」

再び星眼につけた亭の肩が大きく波打つた。

「そんなことで人が斬れるか。眼を凝らしてよく見ろ！」

「ア！」

亭は思はず叫んだ。

二

士は、今亭が出て來た中西道場の高弟寺田五郎衛門であつ

た。上州高崎松平右京太夫の世臣で、早くから平常無敵流を學び、その秘奥を免許せられてゐたが、中西の一刀流を研究せよとの下命を受けて、三代中西忠太の門に入り、門人とはいひながら、師匠の相談相手として、又藝の權威として、斯道に重きをなしてゐる人物であつた。

「お前は白井といつたな。これまで誰に學んだ」

「ハイ、依田新八郎先生について、機迅流を學びました」

「何故その師匠を捨てた」

「……………」

「印可は受けたか」

「いゝえ……………」

うなだれた亨の目からホロリと光つたものがこぼれた。刀の鞘から袴の裾から泥の雫がポタ／＼と滴つた。今まで感じなかつた寒氣が、泥濘に踏み込んでゐる素足から、ソク／＼と身裡に徹つて來るのだつた。

亨は母親の姿をなつかしく思ひ浮べてゐた。暗い部屋で、賃仕事などをしながら、亨の歸りを待つてゐる母親であつた。亨の生活の目標は凡て母親にかゝつてゐた。彼が八歳の時依田新八郎の門に入つたのは、生來劍技に魅力を感じてゐたばかりではなく、それを以て父亡き後の一家を再興し、薄幸な母親を慰めたい一心からであつた。亨は母親以外のものは凡て白い眼を向ける少年だつた。物心つ

く頃からの貧しい生活が、さうした頑な性格を作りあげたのかも知れない。亨がひたむきに打込む劍技には世の情實は無かつた。いやさう思ひたかつた。何よりも實力なのだ。負けず嫌ひな亨は七年の間一心不乱に修業をした。さうして依田の社中に於いては誰にも譲らぬといふ自信を持つに至つたが、何故か師匠はそれを默殺して仕舞つた。憂悶の日が亨に續いた。師匠が印可を與へぬのは家が貧しいからだと亨は考へた。劍技を賣物にする似而非武藝者と師匠を罵つた。さうして去年の暮、決然として師匠の許を去つた亨が、その頃江戸一の繁昌を誇つてゐた一刀流中西忠太の門を叩いたのは、つひ一昨日のことであつた。

「師匠がお前に印可を與へなかつたのは當然だ。わしが依田殿であつても、お前には許さんな」

寺田の言葉に、亨はキツとした目をあげて、

「しかし、私は依田先生の門下の誰にも後れを取つた事はありません」

「誰が訊いた、そんなことを。今日は月並試合だが、お前は誰に相手をして貰つた」

「長井殿でございます」

「長井はたしかお前と同年、それで天狗の鼻は高くなつたか」

亨は黙つて唇を噛んだ。今日の試合に中西の門人達は、新人の者に對する好奇の目で、亨の様子を眺めてゐた。その前で手もなく



やられて仕舞つた亭であつた。

「は、は、は、は、大方そんなことだらうと思つた。わしが今後から氣合をかけると、お前は忽ち刀を抜いて身構へた。斬ると嚇せば直ぐ打ち込んで来る。恐しい男だ。今日の試合にした所で、お前は長井と戦つたのではあるまい。どうだ……わしが一刀兩断にしてくれやうか！」

「……」

「夫れ通達の人には刀を用ひて人を殺さず。刀を用ひて人を活かす。殺さんと要せば即ち殺し、活さんと要せば即ち活す。殺々三昧活々三昧なり。……判るか」

「ハイ、澤庵禪師の太阿記にある言葉と存じます」

「判るのか」

「ハイ」

「これは驚いた。わしは五十一になるが未だ五里夢中だ。今日もそれで参禪して來た歸りだ。お前は偉いのう」

寺田が白隠禪師の高足たる東嶺和尚に参じて、練丹の苦行を續けてゐる事を、亭はかねて中西道場に入らぬうちから聞いてゐた。亭の顔は忽ち火のやうになつてゐた。恥しさに五體は竦むばかりだつた。

「お前とつまらぬ話をしてゐて寒くなつた。まあ折角修業せい」

「ア、先生、少々お待ちを……」

『折角修業せい』

そのまゝ振り向きもせず立去つて行く寺田であつた。亭は茫然としてその後を見送つた。先刻の憤り、屈辱感も跡形も無く消え失せて、そのあとから、足許の見る／＼崩れて行くやうな寂寥感が、ひし／＼と亭を襲つて來た。

『あの寺田先生ですら未だ五里霧中だと云はれた。劍の道は、それ程迄に深く際限の無いものだらうか？……』

いつか風は落ちて、西の空が明るかつた。吹き拂はれたやうな町に、寺田の姿がだんだん小さくなつて行くのを、亭はいつまでも見送つてゐた。

三

『やーッ！』

夜氣をつんざいて、烈しい氣合が流れた。暗い庭で、亭は獨り木劍を振つてゐるのだつた。あれから五年の星霜が流れて、亭は廿歳の若者だつた。氣合をかけると、亭の總身は忽ちきりりと引き緊り、呼吸は凝り、拂ふても／＼斷えず付き纏ふて來る煩惱は、バツとその影を收める。その修業を、亭は五年間一日として休まなかつた。彼の聲は四隣に響き渡つて聞えるのだつた。

『四つ……五つ……』

縁側の端に白い顔が浮んでゐた。母親であつた。どんなに寒い日

でも、毎朝そこに坐つて、亭の氣合の數を讀んでゐるのだつた。

暗い軒端にかさこそ音がしてゐた。亭は井戸端へ行つて水をかぶつた。厨の方からバチ／＼と焚火のはじける音が聞えて來た。

『お前この頃顔色が勝れぬやうだが……』

ご飯をよそいながら、氣遣はしげに亭を見る母親であつた。亭は暫く思ひ惑つてゐる風だつたが、やがて靜かに切り出した。

『實はお願ひがあるのです。寺田先生にもすゝめられましたし、ここ二、三年修業に出たいと存じますが？』

『修業に……』

口の中で云つてツイと目を外した。もう頭に白いものが光つてゐる母親であつた。

『色々と考へて見ましたが、やはり……』

『判つてゐます。それで何時頃出立のつもりかえ？ 旅の仕度は装へておいたが、なにかと用意もあるし……』

亭は思はず目を腫つた。意外な言葉であつた。どんなに愕くだらう、どんなに悲しむだらう、若し泣かれでもしたら……と、恐る恐る切り出した亭であつた。

『お前がこの道に志してから、それはとうに覺悟してゐました。

木劍を振るばかりが修業ではない。旅に出たらそれが判つて來るでせう。私のことなぞ決して心配することはない。旅に果てる覺悟で修業して下さい』

亭はいつか母親の前にビタリ両手をついてゐた。何といふことだらう！ これまで亭の目に映る母親は、男勝りな氣性ではあつたが、無學な、これといつて特長もない世の常の女でしかなかつた。その母親が、彼などの思ひ及ばぬ遙かな世界に到達して、そこから落着いた目で、吾が子の歩む道を靜かに見守つてゐたのであつた。しかし、亭は何故か妙に寂しい氣持だつた。五年前の春、寺田先生から『折角修業せい』と突き離されたあの雪の日の光景がふと亭の胸に浮び上つて來た。亭は又これからの長い、苦しい旅路を思つた。すると彼の決心は急に鈍つて來るのだつた。

「忘れてゐた。鶏に餌をやらなければ……」

と、母親はいつもの靜かな調子で立上つた。

(駄目だ！ みろ！ みろ！)

と、亭は心で呼んでゐた。

四

「では一本やつて見るかな」

「お願いいたします」

亭は既に常々たる劍客者であつた。八年前、江戸を發した彼は、東海道から中國筋を廻つて藩侯の土地岡山に入り、そこで引止められるまゝに道場を開いて六年、三百餘の門人を率いてゐるうち、江戸表から母の大患を知らせて來たから、急いで歸つて見ると、幸ひ



にも母の病氣は大したことが無かつたので、翌日早速寺田を訪ねたのだつた。

二人は道場に下りた。

亭は心中、いかに斯道に悟入した寺田とはいへ既に六十に餘る老體、何程の事があらうと考へてゐた。事實世の例は皆さうであつた。亭自身廿年修業のあとを振り返つて、劍技は結局技の範圍を出るものではない。これは生涯を過つたのではないかといふ疑念に囚はれてゐるのだつた。あの冷たい暗い庭で五年間一日も休まずに木劍を振つた頃の若々しい情熱は、今の亭から次第に失はれつゝあつた。

一刀流定法の相星眼。六尺近い寺田に對して、山柄な亭は間合を遠く、「いやーッ！」と一氣に捲し立てんとした。

「おーッ！」

亭は思はず嚴慄した。なんといふ烈しい氣合！相手の體は急に大きくのしかゝつて来るやうに感じられ、その短い木劍は、忽ち此方の頭から全身に覆ひかぶさつてくるやうで、手足の置所さへ判らなくなつた。

「マ、参りました！」

亭は喘ぐやうに叫んだ。總身の毛根から冷たい汗が流れてゐた。

「大分腕を上げたな」

亭は面も擧げられなかつた。

「だが亂れてゐる。妄念に凝り固つてゐる。心の靈明を失つた劍だ。お前には八年の旅も何の役に立たなかつたらしい。思へば業の深い男よなあ。はゝゝゝゝ」

何故だらう！？ これまで自分の抱いてゐた劍に對する疑惑は、やはり一時の迷ひだつたのか！ どうしたらいいのだ！

「先生、教へて下さい！」

亭は必死に求めた。

「知らんよ。これだけは各々の道だ。自分で歩いて見るより仕方があるまい」

五

「さうむづかしく考へんでもいゝぢやらうがなあ。はゝゝゝゝ」

上人は靜かに笑ひ出した。柔らかな口許を心持ほころばし、幼兒のやうな澄み切つた瞳に微笑をたゞへながら、亭の歎きを聴いてゐるのは淨土の高僧徳本行者であつた。

寺田の前に劍を投げ捨てゝから、亭は道のためには死も辭せずの決心をあらたにして、あるひは斷食し、水浴をとり、あらゆる難行苦行を更に五年の間續けたのだつた。しかし、亭はどうしても悟れなかつた。今は根氣も盡き果てゝしまつた。その亭へ徳本行者の眼をしてくれた者があつた。

「今江戸で評判の上人だ。一度お話を伺つてみてはどうか」

『それ程まだ遺像はしてをらん』

さういふ亭の凹んだ目はギラ／＼光り、蒼白い頬の肉は落ちて、幽鬼のやうな姿であつた。心身共に憔悴しきつてゐるのだ。

『だまされたと思つて行つて見い。なにも修業の爲ではないか』

さう笑められて、漸くやつて來たのが小石川の一行院であつた。

上人は六十に近いお方だつた。

『死ぬの生きるのとめんだうな話ぢや。道はすぐ足許にあるのぢやないかな』

『ハイ……』

『悟るも悟らんもあるものぢやないさ。そのまゝでいゝのぢやよ』

『そのまゝで？』

『逆ふな。自然にまかせたらどうぢや。苦しうなつたら南無阿彌陀』

佛と一心に手をあはせることさ。それで阿彌陀様は御手をさしのべてくださるのぢや』

『……』

『はゝゝゝ、考へんでもいゝさ。思ひだしたらいゝ。親御のお乳をのんだらう。あのありがたい味を思ひだしたらどうぢや。念佛さへ申せば、あのお乳がいつでもたらふくいたゞけるのぢや。なんとありがたいことではないか。はゝゝゝ。……はゝゝゝ』

何も彼も一切包んで、そのまゝ柔かく溶かして仕舞ふやうな笑ひであつた。ちつと心耳を澄してゐる亭の身裡に、不思議な變化が起

りつゝあつた。夜の幕がだん／＼と影を薄めて、ほのかな朝の微光が心の窓から流れ込んで來るやうであつた。

『參詣の方が待つてゐなさる。あんたも本堂へ參じて、念佛を申したらどうぢや』

『ハイ……』

亭はいつか子供の素直さに復つてゐた。

堂内は善男善女の群で一ぱいだつた。上人の姿が現はれると、彼等は一齊に恭々しく頭を下げた。御燈に揺れ動いてゐるどの顔を見ても、單純で、平和であつた。あの鋭い、烈しい氣に満ちた劍道場に人となつた亭には、不思議な世界だつた。

讀經が始まつた。

チーン……。

上人は鉦を鳴らした。

亭はチリ／＼と膝を進めた。鉦の音に彼は不思議な衝撃を受けたのだつた。亭の目はチーンと老僧の手許に注がれた……。

チーン……。

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』

人々は一齊に手を合せた。

チーン……。

亭の顔がサツと輝いた。

『おゝ！』

今上人の姿を見るに、鉦は鳴つてゐるが、その手は殊更に動いてはゐない。自然の妙だ。唱名と手と天機と一致して、そこに自づから妙音が發せられるのだ。

「おゝ、これだ！ これこそ鉦の妙諦だ。これを發見せんが爲に、幾千幾百の劍人が、悩み苦しんでゐるのだ。なんといふ單純さ！

道とは決して何處にあるものではなかつた。自分だ。あの鉦の音だ。悟るも悟らぬもない。そこそこ自分が在つたのだ。上人様の仰有る通りだつた。あゝ、なんといふ有難いことだらう！」

亨の血潮は音を立て、奔流した。全細胞は歡喜に躍動した。疑惑、邪念の黒雲は一瞬にして吹き拂はれた。そこには上人の姿も無かつた。善男善女の群も無かつた。あるものはたゞ天地にみなぎり

第三 放送

法を敬ふの心

佛教信徒として有名な建禮門院さまが、ある日、御受戒なさうとして、當時の高僧、樺尾の明恵上人を御招きになつた時のこと、上人を長押さがつた處におかれ、ご自身は母屋の御簾の内に御座りになつて居られた

そこで上人は靜かに口を開かれ、只今より佛戒をお授けする私は、たかゞ湯淺の權守の子で、下もなき下藺の身分ではあります。佛門に入つてより年久しく、戒を持つことまた諸人にすぐれてゐるつもりでござい

渡る佛の御光りばかりであつた。

「おゝお、おゝ……」

凹んだ亨の兩眼から涙が溢れだした。

チーン……

「南無阿彌陀佛」

亨は合掌した。

× × ×

亨の劍は既に自由自在であつた。寺田は彼に天真一刀流の秘奥を免許した。世人は亨の劍から輪が出るといつて讚嘆した。白井亨諱名は義謙、天明三年生れ、著書に開道論、神妙錄、天神錄等あり。

(おはり)

ます。佛は經文の中に、「高座に登らずして戒を授け法を説くは、子弟と共に罪に墮す」と誠められて居ります。たとひわが身下賤なりと雖も、法師を輕く蔑むは罪いよく深く、これを敬ひ尊ばるゝは利益ます。多いことに存じます。これ人を重んずるに非ずして、法を重ずるがためであります。

されば、いかに仰せ忝なくとも、本師釋尊のみ教法に背き奉るわけには参りません。誰か他の人を請じて御受戒なさいますやう……と申し上げ、悠々立上つてしまつたので、建禮門院さまは大いに驚き、急いで御簾を出でましになり、上人をお引きとめし様々に悔み、上人を高座に恭恭敬しく授戒されたと申します。

大衆歌壇

與謝野晶子選

○ 大阪 小山 文二

わが生はあまりに寂しおのづから大悟得せしめ大悲者ならは

○ 京都 香住 紫精

おん慈悲の彌陀にすがりて満ち足れるこの喜びに今日も暮れ行く

○ 京都 香住 紫精

紅梅のしづかに散りてわが仰ぐ

み堂の春は長閑なりけり

○ 東京 三野輪香雪

ことわりを超えて佛のおん光り

大天地を包むかしこさ

○ 滋賀 本間 秀道

人の世の春をも待たず友逝きぬ

しら雪に似る淨き衣きて

○ 滋賀 本間 秀道

微笑を見する日のなく若き子が

久遠に續く旅人となる

○ 福島 佐藤 峻陽

まぼろしを抱きて夜半に出でつれば月しろくして木の影を置く

○ 石川 神田 默耕

冬の夜の爐をかこみつゝ佛縁をよろこび申す村人同行衆

○ 廣島 川田 信嶺

多なれど歡喜に燃ゆる日を過す

み佛識へみ教を受け

○ 滋賀 高田 清

米糠の上に積れる雪のけて雀取りするわが友の家

○ 奈良 小佛子頼恩

僧堂のいらか掠めて鴉とぶ奈良

の大野は雪となりつつ

○ 茨城 細井凡七郎

眼を病みてほのかに拜む初日の

出くらき心もしばし清まる

○ 北海道 花田 順往

吉水の清き流れに自ら心のあ

かもそそがれにけり

○ 三重 大野 歩行

日没に煙たなびき風落ちて高くさやけし冬の連山

○ 新潟 植木須賀子

うつろなる人の笑ひの寂しさに似たる音立て木枯の吹く

○ 大阪 小山 文二

いちはやく眞冬の庭に咲き出でぬ貴人めきたる臘梅の花

○ 廣島 上原 抱地

藪かげのむかご拾ひて冬山に辛くも生きぬ哀れ山鳥

○ 福島 佐藤末太郎

天地の恵みに生くるこの身ぞと手を合せつつ我れ鐘をきく

○ 和歌山 前田 秀禪

待つ月の昇らぬまゝに夜の更けていつしか通る終列車かな

○ 青森 土岐 學信

初春の夜半の月をば眺めつつ里の父母思ふこの頃

○ 東京 我妻 千水

雨すぎてしめりすがしき木々の葉を吹きつる風の心地よきかな

○ 東京 關谷 秀峰

芹つむと我手をひたす初春の野澤の水はしみて冷たし

○ 東京 卜部 寂水

わが願ひかなへることにあらねども心清く今日を送りぬ

○ 福井 豊原 宗嚴

淨土とは後世とばかりも思ひしに今ぞ手に取る淨土うれしき

○ 長野 田中 廣司

朝な朝な拜む佛檀心をば清淨にして日毎願みぬ

○ 福井 寺井 藤堂

おほらかに春は來ぬらし霜土の底より生れし小さき草の芽



南 海 に 翻 へ る

(日) (章) (旗)

南 洋 を 訪 づ れ て

江 藤 澂 英

龍宮の繪をみるごとく南洋は

眞青の水に赤き魚とふ。

綠青を溶かせるごとく海水の

底まで透きて魚の住む見ゆ。

横濱を解纜してから七日目、

我が海洋の生命線、南洋に向つ

て、山なす波浪とたゝかひつゝ

難航に難航をつづけた泰安丸が

サイパン島のガラパン沖合に着

いたのは、昨冬十二月十八日―

しぶきを立ててゐた風も漸く風

いで、赫々たる日光が照り輝い

てゐる朝だつた。

船艙に憫んで船室深く引きこもつてゐた私

も、いざ上陸といふ知らせに、俄かに元氣づ

いて、身廻りの支度をすまし急いで甲板へ出

て見た。

思へば、横濱以來甲板に立つて海を見るの

は初めてです。

おゝ！懐しの南洋、憧れのサイパン島、そ

れが今、私の眼前にその麗姿を浮べてゐるの

です。何と美はしの海水だらう。さながら緑

青を流したやうに水の色は眞青です。それが

椰子の葉の茂る彼方の島かげでは、白馬の麗

るやうに、純白な波の花を咲かせてゐるので
す。それこそ清澄そのものと云つた感じがしま
す。——海の底の底まで透き通つて、赤い魚
群の泳いでゐるのが手にとるやうに見える。
私は思はず絶讃の聲をあげました。

○

やがて、白いヘルメットに地下足袋といふ
凡そ内地ではめづらしいで、たちの青柳開教
使や、南洋寺の總代世話人の方々など、多数
の人々に出迎へられて、南洋貿易會社の棧橋
へ上陸した。波止場には群集がざわめいてゐ
る。棧橋べりの、黄いろい花をつけた大樹の
陰には、輕羅を纏ふた若いなまめかしい女の
一群が、一種の哀愁をつゝんで佇んでゐる。



「南洋情緒」とでもいふやうな氣
がしました。

見るもの、聞くもの、すべて
珍らしい。歩を運んでゐる私の
耳のそばで、

「今日の未明に、こゝで爆弾心
中がありました……」

と、如何にも大事變があつたかの如く、開
教使青柳君がかう囁いて呉れました。——そ
れによると、築港作業中の廿四歳になる青年
工夫と、某料亭の十八歳になる酌婦とが、お
手のものゝダイナマイトに點火して、抱合心
中を遂げたのだと云ふのです。二人とも身體
は粉微塵になつて、實に悲慘を極め、見る人
の目を覆はしめたさうです。成程、この狭い
土地では大珍事に違ない。それが、私が今か
ら行かうとする南洋寺の信徒で、今夜はその
お通夜だとの話です。

私は一先づ「紀の國」といふ旅館に旅装を
解きましたが、しかし疲勞を醫する間としては

なく、早々にサイパン支應を初め、ガラパン
街の主要な方面を廻訪して、南洋寺に詣でま
した。

南洋寺はガラパンの街端れにあるのですが
未だ借家住ひのいぶせき陋屋です。そこで、
青柳、坂本の二人の青年僧がみ佛をまつて
まめやかに奉仕生活をつゞけてゐるのです。

——佛間には壹月海旭先生の太寫眞が掲げ
られて、「恩師の遺訓を奉じて、誓つて、南洋
寺の建設を期す」と、雄々しい青柳君の決意
が示されてゐるのもうれいことです。

○

それは私がこの南洋寺の總代や世話人の方
から、南洋寺に關する過去、現在の狀況を詳
かに聴き終つた時のことです。丁度、黄昏時
で、夕闇みがアカシヤの葉かげに押し迫る頃
小さな白布の包を貳個、恭しく捧げた男女
二人を先頭に、澤山な人がこの寺の門を這入
つて来る。今朝、爆弾心中を遂げた二人の變
つたすがたです。それを人々の温い情によ

つて、火葬をすませ、骨上げをして、今この門に差ししかゝつたのです。

佛堂といつても、僅かに八疊か十疊です。

伴に來た大勢の人々、その全部がこの狭い堂の中に這いれやう筈がありません。堂前に聲もたてずに佇んでゐるのです。いよく、灰葬といふ段取りですが、その讀經と回向を、是非私にしてくれと云ふのです。何も結構です。私は心よく引うけて、青柳、坂本の兩君と共に、懇ろに讀經回向をしました。そして、

「皆さんー」

私は小さな貳個の白骨を前にして、會葬の人々に、かう話しかけたのです。私は、因縁の不可思議といふことや、死の縁の無量なこと、無常の迅速なこと、往生の眞意とか、お念佛の肝要なことなどをしみじみと話しつつけました。

すると、私の話を聞いてゐた女の人の中から、かすかな歔歔の聲が洩れ初めたのです。私の話聲もいつしか泣聲になつて來るのを、

どうすることも出来ませんでした。一人から二人、三人、四人女も男も皆んな泣いてゐるのです。聲を立てゝ泣いてゐるのです。私の兩眼からも、おさへきれない涙が……。

これまで幾百度、講演もしましたし、法話もしました。しかし、私はこの時ほど眞實な眞實な氣持になつた事はありませんでした。眞に涙を以て語り、涙を以て受け入れられる話、何といふ尊い眞實な情景でありませう。話そのものは平凡でも、法味に渴しきつた人々の胸には、眞實そのものの叫びこそ、千天の慈雨の如くにも感ぜられたのでせう。參詣しようにも幸院なく、拜禮しやうにもみ佛在さず、法を聴かうにも教師なし。

南洋の別天地——。

眞に宗教に飢ゑ、法味に渴し切つた人達ほど氣の毒なものはありません。

その夜、私は總代の一人から、内地に歸るのを一便船運らして、是非この飢ゑた島の人に、信仰に生きる法味を分つて欲しいと歎

願せられたことでした。聞けば、ある島の農場などでは、親子夫婦、近親の死に會つてもたゞその亡き軀を埋葬にしたゞけで、一遍の念佛も、一聲の讀經も手向けられず、所謂屍は苔の下に埋れ、魂は獨り旅の空に迷ふといふ憐れな幾多の同胞があるとのこと、それ等の回向も懇願されたのです。しかし、残念なことに、私は宗教多端の身で奈何ともなしがたく、それ等の願望を果たさずして歸途についたのです。蓋し、苟も一度法に捧げし身である以上、これ等の氣の毒な同胞のために、欣然としてその地に踏み止まり、説法教化、讀經回向、その請ひに應ずるのが當然であつたと思ふのですが、私には既に課せられた任務があるため、その請ひに應じ得なかつたことを、まことに相済まぬことだと思ふと、今でも胸は一ぱいです。

○

また私は、サイパン島の街頭で、鶏卵を賣り歩いてゐた、年のころ六十餘りにも見える

「老人と次のやうな會話を交しました。」

「お爺さんの故郷は何處ですか。」

「福島縣です。」

「興發の松江社長さんと同國ですね。」

「さうです。」

「何時こちらへ渡られましたか。」

「六年ばかりになります。」

「どうですか。」

「誠に結構です。こんな極樂なやうな處を、

五十過ぎまで知らなかつたといふことは、思

ひ出して残念です、こん

な結構な

ところ

は御座

いませ

ん。」

老人の

言葉はまじ

めです。私

は折り返して

聞きました

「何がそん

なに結構な

のですか。」

「それは、

それは何も

かも結構で

す。私は今

息子夫婦と



孫二人と五人家内ですが、故

郷におる時は、一生懸命に働

いても、不作な時は年貢も

納められず、家内中飢餓に

頻して、木の根や干菜で一冬過したこ

ともありました。それに冬は寒さにふるへて

せん。」

と云つて、この老人は南洋の生活を禮讃謳

歌するのです。

げに、南洋の地は天恵に依つて、働いて食

ふことにおいては確かに保證されておると云

へませう。

どんなに苦んだか知れません。しかしこちらに参りましてからは、着物は着なくてもよく、地面は廣い所を耕作させて貰うて、働きさへしたら何の不自由もありません。昨年は一年中で三百何十圓から稼ぎました。

(南洋興發會社では、小作制度で、一家族に六町歩の土地を與へて甘蔗を作らせてゐる)尤も、お米や野菜、雜詰など、會社で貰うてゐるものを差引されましたが、それでも六、七十圓は残りました。私がかうして卵を賣ればこれだけ残ります。孫など、どんな事があつても故郷へは歸しま

しかし、私は南洋寺で宗教に餓ゑた人々の姿を見、更に今この老人の告白を聞き、またその他の人々の希望などを参照して、靜かに思ふのです。——なるほど老爺の云ふごとく働いて食ふ點に於て、南洋は恵まれておりませう。食ふだけに於ては、何ら不自由はありません。しかしあの廣々とした大農場の彼方此方に、點々として三々五々に散在する農家、彼等は遠く故國を離れて、南洋絶海の孤島に、日夜營々として勞作に従事しつゝ、その生活をつゞけてゐるのです。彼等の一家が打ち揃うて健全な間は、たゞ働いて食ふ事に於て、そこに何等不満や不自由がないかも知れません。一日の勞作を終えて、野中の一軒家に歸つて來た時、彼等の一家が老人も、夫婦も子供も、團樂として食卓を圍み得る時は無上の幸福でありませう。だが、しかし、一度彼等の一人の小供が發病した時、そしてその子供が萬一死去した時、或は夫が先立つた時、妻に死なれた時、老父が世を去つた時、

その時こそ、彼等の心に残るものは何でありませう。

この世界に生をうけてゐる者に、死の縁は無量であり、無常は迅速であります。いつ何時死なねばならないのか分らないのです。はき出した息が再び入らず、吸ひ込んだ息が出なかつたら最後です。生死は呼吸の瞬間を期し得ないのですから……。その時こそ彼等は途方にくれるのです。周章狼狽、眞に心身の措き所を知らぬといつてもよいでせう。

○

ある一人は眞實に訴へました。——島で近親の死に會ふほど悲慘なことはありません。お寺はなく、坊さんはおられず、どうすることも出来ません。誰かお經を知らないか、御詠歌をとなへることの出来る人はゐないか、和讃を知るものはないかと探し求めて、一時の氣やすめに、お經のまねごとをして葬つても、決して落つかれません。死んで行つた人は兎も角、残つた近親の者は到底心が安まり

ません——と。

この叫びは眞實であらうと思ひます。新開の植民地、未開の不自由さは種々なる方面にありませう。醫者も必要であり、産婆も必要です。しかし、それだけでは足りません。宗教が必要です。特にわれ等佛教信者にはお坊さんが必要であります。どうか早く教會所を建てて頂きたい、坊さんを派遣して欲しい、かうした痛切な要求をうけたものであります。

私は南洋の一角を覗いて、あの未開地を僅か十數年にして開拓し、南洋應の民政治下に燦然たる文化を布いた日本人の力、南洋興發會社の盛んな製糖事業、實に日本民族の躍進する雄姿に驚かざるを得ませんでした。しかし此の科學的、物質的活躍の一面に反して、精神的、宗教的生活に於ては、何等の満足をも得てゐない實情を見る時、あのガラパンの街に、カナカ族やチャムロ族の島民達が、低級な文化人であるにせよ、晨は天主堂の高らか

な鐘の音に明け、夕はパンの樹の茂るミツシ
ヨンスクルの玻璃窓を洩れる、讃美歌に靜
かにたそがれ行く、彼等の一日を考へると、
島民の方が遙かに精神王國に於ては、幸福者
ではないかと思ひます。サイパン島に於ける
島民は、すべてカソリックの篤信者です。ス
ベイン人の牧師や、修道士が、熱心に教化を
布いてゐます。南洋全島五萬の島民に對し、
基督教は二百人の教師と、百餘ヶ所の教會所
説教所を有つてゐるのです。しかし、同じく
約五萬の邦人には、僅かに八人の佛教教師と
五ヶ所の教會所があるのみです。

赤裸々！

◇罵られても、急所へさわらぬ
内は腹は立てぬ。而し、急所へ
當つて来ると、今迄の大雅量家
も一遍に反駁家に變る
◇便所から出て手を洗ふ。
何も手が、そんなにキレイに

○

雄々しい躍進日本、大乘佛教國を以て世界
に誇るわが日本、日章旗の進みゆく所、いか
がはしい女群の伴ふよりも、佛教僧侶の伍し
行かぬといふことは、われ等佛教徒、殊に佛
教僧侶の一大恥辱ではないでせうか。
われ等生ける人間として、第一の問題は、
魂の安息であります。生活、たゞ食ふだけ
の生活の謳歌、その次に起るべき一大問題、
人は眼前の生の問題のみに捉はれて次の魂
の安息を忘れがちであります。殊に到る處堂
塔簾え、伽藍連り、端嚴なる諸佛菩薩の在す

中野 尅子

なつたのではないが、手を清め
た気分がいののだ。日に幾度か
「心の手を清めよ」。
◇自分の襟はキタナクはない
が、他人の襟はキタナイ。
◇勝つた時は寂しい、殊に肉身

あり、説教に、講演にことかゞぬ内地にあつ
ては、餘りに環境が恵まれすぎてゐるため、
反つて人はすべてを忘れがちであります。し
かし、かの南洋の孤島の如き、一方たゞ力の
みをたよりとして進みつゝある同胞が、折に
ふれて求むる魂の叫びこそ、眞に尊い人間
本來の要求でありませう。
われ等は自己の幸福を深く省察すると共に
南無阿彌陀佛の念佛が、心から相續されねば
ならぬと痛感するのであります。

(おはり)

との喧嘩の時は……。

◇自分で自分をホメルことは
廣告にはならぬが、自分で自分
を自嘲することは、最上の廣
告術である。
◇月給がダン／＼ふえるに従
つて人間は下落する。初任級時
代が一番尊い。

◇人を惹きつけて、もうよしと
思つた時は他かれる。常に「他
人」を見下して「自己」を省よ
「自己」を忘れぬ者は、いつまで
も他人を引きつける。
◇世間には、そうエライ人はな
いものだ。自信を以てやれ。驚
くことはナイ。



信仰による出世美談

『出世藤』の由來

本誌記者

参拜者の眼をそばだたしめてゐる。記者は何かこの『出世藤』には秘められた物語があるに違ひないと、或日御住職の中島眞孝氏に刺を通じた。

中島氏は心よく『出世藤』の因縁話を語つて下さつた。誠に『出世藤』の名にふさはしい信仰實話が秘められてゐた。

記者はこの話を是非とも『浄土』に発表したいと申出でたところ、氏は

「一應は断はらなければ」

と多忙な中をおしきつて、日の暮れ近くに記者を帯同して、この藤の寄附者であり、話の主人公である大森の電機株式會社の社長を訪れて下さつた。

社長は當年四十三歳の働らきざかり、會社は事務員、職工加へて約百五六十名、目下大講堂の増築中で目の廻るような忙しさだ。

既に薄暮で、社長は事務を終つて將に歸宅せられんとしておられたが、心よく二人を招き入れて、一時間半許りいろ／＼と有益な話をして下さつた。

「是非發表さして頂きたい」と願ふと、

「イヤ、發表するやうな話ではありません發表しては怒りますぞ」

の藤を聞き乍ら御暇したが、記者は折角のいい話をストツクするのも惜しいと思つて、氏の匿名を使つてこゝに發表する事とした。

まへがき

下れば下る程見上げられる藤の花。

長く垂れ下つた美しい藤の花を、昔の人はよく謙讓の人に例へたものであるが、出世するにつれて、益々人を敬ひ、世の中を尊ぶ人ほど尊敬を集める人はあるまい。

東京の青山に梅窓院と云ふ浄土宗の巨刹があるが、昨年の暮に突然、境内に藤が植えられて、綺麗な棚さへ作られた。而もこの藤に『出世藤』と云ふ奥床しい名前が付けられて

信仰で更生する

林新治郎氏が東京の金物屋に奉公に出たのは十四の春であつた。

父に早く死別したので、母の實家である千葉縣の行徳の光林寺と云ふ淨土宗の寺から小學校に通つたが、學校を出るとすぐに奉公に出たのであつた。

當時の金物屋は總らゆる機械類をも販賣してゐたので、慧敏な新治郎氏は機械の種類からその工作法迄瞬く間に學びとつてしまつた。

「よし！ 僕は未來の鋼管會社の社長だ」

或時から嘯いた事があつたが、それは外國から輸入される鋼管が餘りにも高いのに憤激して、廉く而も多く賣らうとする新治郎氏の奔放な事業熱の發露であつた。

併し機を見るに敏な新治郎氏の眼は、その實、他の方面に向いてゐた。著るしく發展してゆく電氣事業がそれであつた。金物屋で覚えこんだ電氣器具に關する知識は時勢の需要に日々發展してゆく電氣事業に非常な興味を

覺えしめた。新治郎氏は自分の進路を拓く爲に決然と電氣屋に奉公代へしてしまつた。

器具に緻密な知識を持つてゐた新治郎氏は



直ちに主人に重要視された。不斷の努力と雄心勃勃たる事業熱とはこゝで遺憾なく發揮された。同僚の羨望中に十九萬圓の電氣設備の仕事に請負はされたのは僅かに二十歳の時で

あつた。才氣煥發な新治郎氏は勿論見ん事成しとげたが、如何に立派な力量を持つてゐたか驚く許りである。併し、この成功の裏面には母親の烈々たる信仰の力が動いてゐた。新治郎氏がこの仕事をなしてゐる間、母親は淺草の觀音様に日參して息子の成功を祈つたのである。この母にこの子あり、後日の新治郎氏の出世には、この母親の信仰心が大きな原動力となつたのである。

併し此頃から新治郎氏の心中には粗野な電氣器具で、而も莫大な利益を貪る裏面を淺く考へ始め、器具を精密に改良し、廉價に販賣しようと思ふ氣持が萌して來た。

天才的な發明心は此頃から發揮されて來た併し、それと共に新治郎氏の他の心中にはよからぬ氣持が動き始めた。

「俺は偉いんだ」

と云ふ慢心が生じて來たのだ。丁度その時に病氣になり店も止めてしまつた。併し、如何に才智ありとは云へ、學歴もない青二才の彼を直ちに雇つてくれる店はなかつた。獨立し

やうにも資本はない。新治郎氏の苦闘時代が訪れて来た。やけ氣味のいらたゞしさが彼の心に充滿した。何しても面白くない。あちこちの友達を頼つては寄食生活に時を過した。寝る場所すらなく公園に夜明した事も再三再四であつた。今迄の慢心も誇りもあつたものではない。併し、この時代こそ新治郎氏が心を鍛へた時代である。

苦境の時こそ始めて人の情が判るのだ。餘りにも冷淡な人の世の情、新治郎氏の心中には深刻な精神革命が生じた。自己の慢心をたゞき折ると共に、人の自我心の強さをハッキリと認めた。勿論、新治郎氏のこの精神革命には慈愛深き母親の信仰的な激勵が大きな力となつて働いた。

「母親、そして佛様の慈悲。これこそ僕を更生させたものだ」

新治郎氏は今迄のだらしない生活を放棄して決然と新生活に旅立つた。

佛壇こそ家の中心

三田の松本町にさゝやかな店を借り、電氣器具の販賣を始めたのは二十三歳の時であつた。淺草の伯父の處の電話を借りて細々とではあつたが、彼の心は非常に朗かであつた。心中に眠つてゐた發明心もむく／＼と醒めて来た。丁度その時電柱ブラケットの注文を受けたが、その品の粗惡にして高價だつたのがきつかけになり、連日、寢食を忘れて工案した結果、遂に精密にして廉價な林式ブラケットを完成する事が出来た。更に氏の發明欲は止まる所を知らず、優秀なソケットを作り出し、新案特許をとつた。かくして大正四年の春には大崎に小さな工場ではあるが、職工を使つて林式照明器具を作り始めた。

廉價で而も良品を誰が見逃さう。事業は年々に發展して行つた。工場も大きくなり、職工も多勢になつて行く。併し發展すればする程、母の恩と佛の恩とがしみ／＼有難く感ぜられる、新治郎氏の孝心と信仰心とは燃えたつて来る。三田四國町の陋屋に佛壇を買入れたのは大正七年であつた。

「お母さん、小さな粗末な佛壇ではあるが、これが家の中心だ。佛恩、祖先の恩に報ゆる私の眞心だ。今の私としてはこれがせい／＼だ。この小さな佛壇で我慢して下さい。併し十年後には必ずこの十倍の佛壇を買つて、佛様の恩に酬ゆるから」

と涙ながらに母に訴へた。信仰厚き母は粗末な佛壇に不満足かに見えたが、孝心深い新治郎氏のこの言葉を聞いては、心打たれて、心では感謝の涙にむせぶのであつた。十五圓五十錢の家賃であつたのに、佛壇は四十二圓であつたと云ふ。當時の新治郎氏の生活状態から云へば破格の佛壇だつたのだ。

この信仰的な新治郎氏の事業だ。林新治郎商店はトン／＼拍子に發展して行つた。殊に大地震の時には義侠的な氏の活躍によつて一段と發展した。

併し、天は二物を與へずとか、母親はこの發展をよそに大正十四年に忽然と他界した。「お母さん、約束も果さない内に死なれて、新治郎は斷腸の思です。」

さめ／＼と死骸にすがつて泣きくれる新治郎氏の心中は如何許りであつたらう。も少し生きてゐてくれれば、必ず十倍の佛壇を買つて喜ばして上げたのに。

その後、事業は益々順調に發展して、大正十五年には大森に五百坪の地を卜して工場を建築し、職工も三十餘名使ひ、名稱も林電機製造所と改稱した。自宅も近所に移り、結婚もした。この移轉の際に、林氏は工場の前に藤を植えて、不風雅な工場に一抹の美を與へた。

(青山の梅窓院 遠影)



更に努力を續ける内に、今度は妻の病死に會ひ、また／＼人の世の無常をしみ／＼と味はつた。妻の病死後愈々意を決して數萬圓を投じて、自宅を新築し永年の約束であつた佛壇を購入した。

「お母さん、約束の十年を遅れる事三年、誠に申譯もなく恥しくもある。併し、どうにか事業も順調に發展し、今こゝに佛壇を購ふ事が出来た。これもひとへに佛様のお蔭だ。今後とも佛様や祖先の御恩報謝に努むる覺悟だから、三年遅れた事はどうかお許し下さい。」

孝心厚い新治郎氏、亡き母に悶々として訴へる彼何と云ふ美しい情景だらう。

新築祝には光林寺の住職を呼んで、佛様の開眼供養を懇に營んだ。

「世間では座敷開きと云ふものをしますが、私は私を今日にして頂いた佛様の御恩の萬分の一にもと、佛壇を開眼して、この

御恩に酬いたいと思ひます。皆様どうか御慶香をして頂きたい。」

信仰に生きた林氏、孝心厚き新治郎氏の面目躍如たるものがある。

既に今日では益々發展して、職工、事務員は百數十名となり、工場は幾棟と増築され、林式照明器具の販路は日一日と擴げられて行き、大阪にも支店さへ作られた。而も事業の發展につれて、昨年の十二月には資本金一百二十萬圓の林電機株式會社に變更されて、林氏が自ら取締役社長に就任せられた。この素晴らしい躍進、林氏の、人格と信仰によることは勿論ながら、世に珍らしい出世談ではある。

工場の増築につれて、工場の前にあつた藤が邪魔になり、その始末を考へられてゐたが、遂に縁縁にあたる中島眞孝氏の梅窓院に寄附し境内に植ゑつけられたのである。

中島氏は、この藤に藤の出世と林氏の出世とに因んで「出世藤」の名を與へ後世にこの信仰美談を残される事となつた。

開かれ行く人格の光

佛說阿彌陀經講義 (其五)

中村 辨康

(一一) 體驗される信仰

私達には何うも悪い癖がある。

他人の悪口などは何の顧慮もなく直ぐ信じて仕舞ふが、少しでも自分に眞似の出来ない善い事になると「さあ何うか知ら」と疑ひを起して、中々信ずる氣になれない。

悪い事は嘘でも嘘と思へず、善い事は本當でも本當と思へないのである。

何と云ふ浅間しい料簡だらうか。

私達の疑ひは實に浅つばかりであり、其場限りであつて、トコトン迄疑つて行つて本當に其正態を突止めようとしてもしない代りに、一應は何でも彼でも疑つて見るのである。漢字では之を病氣だとして「癡」と云ふ字で輕蔑して居るが、それは正しく利好ぶつた馬鹿だと云ふ意味である。

釋尊だつて人間なのだから、人間の氣持を皆な知つて居られたに相違ない。

だから疑ひ易い人間をして何とかして疑ひなからしめ、是非本當の正しい素直な人格的な人たらしむべく、阿彌陀佛を執持せしむるやう、此經に於て口を酸ばくして前後四遍も「發願せよ」と勧めら

(本文再出)

舍利弗、我見是利、故說此言、若有衆生、聞是說者、應當發願、生彼國土。

(釋尊の勸説)

(和議)

舍利弗よ、私は他の一切の道徳的及び宗教的行爲では到底このやうな理想の世界を我がものとする事は出来ないが、唯だ阿

彌陀佛の御名を執持すると云ふ信仰的行爲のみで、それを得る勝れたる利益のあることを知つて居ればこそ此の様な斷言をするのである。されば人々よ、私の此の證言を聞いたら速かに私の言葉を信じて、彼の阿彌陀佛の世界に往生せよとの願ひを發して貰ひたいものである。

れ六遍も疊みかけて「信ぜよ信ぜよ」と勧められて居る。加入、私達人間の功利的な氣持をも一應受け入れられて、特に「此利益あるが故に」と誘導して下すつて居られる。

思へば本當に有難いことである。

無論信仰の上に於ては「利益」など云ふことは寧ろ第二義的なもので、そんな功利的な利益に引摺れるやうな信仰は純粹なものではないが、然し利益にも依りけりで、物質的な而も一時的な、ヤレ病氣が癒るの、ヤレ御金が儲かるの、と云ふやうな其場限りなものでなく、もつと根本的な永遠的な、そして高潔な哲人の望んで止まない人格的生活に就いての利益ならば、本當の利益であり、本當の願望として望んでもよいことである。

「往生」と云ふ事は現實的に云ひ換へれば「更生生活」のことである。正しく更生した生活こそ一分の往生に外ならない。

全分更生された時だけのみが「往生」でなく、一分の更生でも一分の往生であるべきであるから、「一念に一度の往生」と云ふことも云はれてよい譯である。

私達が「南無阿彌陀佛」と念佛する時、私達の心は阿彌陀佛の中に統一され融合されて仕舞ふことは、念佛する者の日常に經驗する事實である。よしそれが瞬間的な經驗であるにしろ其瞬間丈は何等の邪心もない清淨無垢な美しい心である。この阿彌陀佛の中に統一された心こそ、現在に於ける私達の一分的往生と云ふ體驗である。然かも此體驗が何時でも、何處でも念佛しさえすれば直ちに體驗されるものであるから「決定往生」と云ふ確信にも至り得る譯で、それは決して頭の中だけで想像し

て居るやうな空想ではない。しかもさうした経験が度重なれば、生活の上にも反映して、段々現實生活も淨化されて来る筈で、信仰と云ふものが單なる主觀丈でないことは云ふまでもない。

若しそれが主觀丈に終つて生活の上に現はれて來なかつたら、それはまだ正しい信仰でなかつたかまたは修養が足りなくて物質的な我欲が其人を強く支配して居て、恰度グライダーを飛ばすだけの力が附與されて居ないかに過ぎないのである。

グライダーを飛ばすゴム紐の力が弱いから、グライダーをつなぐ綱がまだ切られて居ないか、グライダーを逆に引く牽引力が少ないか、かう云つた必要條件の不備に依て、飛ばないからグライダーなんて駄目だとする理由にはならないやうに、私達の念佛に依る生活の更生が事實の上に現はれて來ないのは念佛が悪いのではなく、念佛する私達がまだ本當の念佛になつて居ないからである。

但し私達の生活は全くグライダーの後綱が切られて居ないやうなものである。随て何者にも掣肘されずに思ひ切つて飛んで行ける自由な生活が出來ないのである。悲しい哉、なまじいにある地位とか家族とか其他色々なものに引きづられて、色々な慾を出すものだから、下らなく生活に追ひ廻されるとき使はれて、舉句の果には、くたくたになつてへたばつて仕舞はねばならなくなるのである。

然し念佛に依てたとへ瞬間だけ宛でも一分の往生を體驗して行けば、恰もグライダーが三十分でも一時間でも飛行が出来るやうに、私達の生活も段々淨土的に淨化されて行く筈である。かくの如くしてスツカリ後綱の斷截られた時、全分の往生が完成されること、云ふ迄もないことである。

之を釋尊が「此の利を見るが故に」と云はれ「願ひを發して淨土へ往生せよ」とすゝめられたのである。

大體に於て人間も七十からになると、色々の經驗を経て来るものだから、夢の如き過去を顧みて、泡の如き人生の起伏を諦観する事も出来、隨て若い者のやうに慾の皮を突張らなくなつてよい筈であるのに、多くは年を取る程慾が深くなつて来るやうである。蓋し孔子のやうな道德的に傑出した聖人にしても、六十歳で耳順ふ人で有り得たと云はれて居る。耳順ふとは他の善を善として信じて行ける人、正を正として直ちに實行して行ける人の事である。つまりは素直な信仰人のことである。このやうに如來の言葉、天の言葉に順つて生活して行くことこそは、全く心廣やかな往生的生活である。然し此人にして尙ほ天地の大道と自分の慾とが一致し得た淨土生活は其後十年の日時を要して居る。茲まで到達することは信仰の上でも餘程時間を要する譯で、さうなれと云つたとて中々なれはしない。相當に信仰と情實生活との精神的葛藤を経てからである。然し信仰に依れば何も六十七十にならなくても往生的生活の出来ないことはない。それは古來から經驗すみのことであるから、私達と雖も「執持名號」さへ忘れなければ、何時かは茲まで導かれて、平安な心のどかな然かも元氣に充ちた淨土的生活を楽しむ事が出来ること疑ひはない。法然上人の御歌の、

阿彌陀佛と申すばかりをつとめて淨土の莊嚴見るぞうれしき

と云ふ境地こそは理想的な平安耳順の淨土生活である。

然し、かう云つたからと云つて、信仰と云ふものを大變むづかしいものと考えなくともよいと思ふ。と云ふのは前にも云つたやうに、恰度汽車のレールに乗つたやうなものだから、レールのある限り、念佛心の存する限り、何處迄も何處迄も進んで行けるからで、自ら心配しなくとも、如來の大増上緣力が引つばつて呉れるからである。

何れにせよ、釋尊が御自分の幾多の宗教經驗の中から、最も純粹な最も勝れた實踐法として「執持名號」法を撰出し、之を私達に口をすつぱくしてまで勧めて居られるのである。

阿彌陀經の話相手は智慧第一と云はれた長老舍利弗である。即ち智慧の極まるところに此の念佛法門が展開されて居るのを知る。そして釋尊の絶大な慈しみと悲しみとが、後世の人々への贈物として此念佛に依る往生をすゝめ、且つ矢鱈に疑ひを懷いて「信」と云ふものから成るべく遠ざからうとする惡癖を持つ私達へ、色々な形で「信ぜよ、信ぜよ」と疊みかけて居られるのである。本當に此親切な心使ひを思へば、少し位は嬉し涙をこぼしたつて不思議ではないと思ふ。

それなのにまだ信じようもしない私達こそは、實に云ひやうもない程の「ひねくれ者」である。私達はもつともつと反省しなければ罰が當るであらう。

(二三) 疊みかけて居る信仰への勧め

信仰と云ふものは到底言葉では云ひ切れるものではないが、其氣持としては大宇宙の凡てから承認されて居ると云ふ感じなども其一つであらう。

(本文) 舍利弗、如我今者、讚歎阿彌陀佛、不可思議功德、東方亦有、阿閼鞞佛、須彌相佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛、如是等恒河沙數諸佛、各於其國、出廣長舌相、徧覆三千大千世界、說誠實言、汝等衆

の經典では十方に分けて居るゝなどに分けないで、一つに引きくるめて簡單に片付けて仕舞つたらよささうに思はれるのに、御叮嚀にも先づ最初に東の世界に就てガンヂス河の砂の數ほどもある諸佛が證言して居ることを擧げて「諸佛も勧めて居るのだから、君達も信じなければいけない」と勧められ次ぎ次ぎに他の五方を擧げてくどく繰返して居られるのだから、釋尊の宗教感情と云ふものは此處ら

生、當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經

(東方諸佛證誠)

舍利弗、南方世界、有、日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛、須彌燈佛、無量精進佛、如是等(下略)

(南方諸佛證誠)

舍利弗、西方世界、有、無量壽佛、無量相佛、無量幢佛、大光佛、大明佛、寶相佛、淨光佛、如是等(下略)

(西方諸佛證誠)

舍利弗、北方世界、有、焰肩佛、最勝音佛、難沮佛、日生佛、網明佛、如是等(下略)

(北方諸佛證誠)

舍利弗、下方世界、有、師子佛、名聞佛、名光佛、達摩佛、法幢佛、持法佛、如是等(下略)

(下方諸佛證誠)

舍利弗、上方世界、有、梵音佛、宿王

あたりから餘程高潮して來て居ると想像し得るのである。

ガンヂス河の砂の数と云つたら、もう算盤のけたをはづれて居る。何しろ一佛の世界が既に三千大千世界なのだから之はもうそれ丈で時間と空間とを盡くして居るのに、夫れを恒河の砂の数だけと云ふのだから途方もない廣さと見なければならぬ。東方と限つては居るが實は方角を超越して、私達は「一切の佛達」と云つた感じを受ける丈である。だからそれ丈で充分の上にも充分なのに、其上へ其上へと重ねて幾度も恒河沙を云ふのだから、其廣大無邊なる天地は想像も及ばずスバラシク擴大されて、聽く人は唯だ驚歎するばかりである。それは畢竟「天地全體から承認されて居る」と云ふ確信を現はすのに、かう疊みかけなければ、感情が承知しなかつたからであらうと同時に、私達人間への信仰勸誘は一邊や二邊では到底駄目であるところから「是れでもか、是れでもか」と老婆心的なやる瀬ない氣持を働かせられた爲であらうと想像されるのである。

近頃の類似宗教見たやうな功利的な信仰なら、打算的である丈に、誰でもすぐ飛びついて容易に其處へ入りこめるけれども、正しい信仰へは中々困難である。佛教の目指す目的を「執持名號」と云ふ念佛で獲得し得るとは、餘程佛教に親しんだ人達でさへ納得する事が出来なかつた實例が澤山あるが、之れと共に古來の傑出した有名な佛教學者が、何れも云ひ合したやうに晩年になつてから、漸く念佛へ歸着し往生を念願したことを考へると、念佛への信仰は宗教的な素質を持たない限り中々困難な事だと云ふことが判るのである。さればこそ此阿彌陀經でも「念佛は難信の法だ」と云つて居り、これを信じさせるやうに話しをすることは並大抵の苦勞でないと「之を難事とする」とか「甚難である」とか云つて居る次第である。

然し翻つて考へて見ると「淨土の信仰」は、印度で芽を出し支那で花を咲かしたとは云へ、その何

佛、香上佛、香光佛、大焰肩佛、雜色寶華嚴身佛、娑羅樹王佛、寶華德佛、見一切義佛、如須彌山佛、如是等恒河沙數諸佛、各於其國、出廣長舌相、徧覆三千大千世界、說誠實言、汝等衆生、當信是稱讚、不可思議功德一切諸佛所護念經 (上方諸佛證驗)

(和讃)

舍利弗よ。私が今「阿彌陀佛」の御名を執持することに依て、煩惱を持つて居る人々が、淨土に往き生れ得る」と云ふ阿彌陀の不思議な功德を讃めて證言をして居ると同じやうに東方の恒河の沙

れにも榮えることが出來ず、唯だ我國に於てのみ實を結び得たと云ふ事實は、誠に不思議なことである。少くとも我國の全佛教信徒の二分の一からが淨土信徒である事實は、日本人のみが本當の宗教を解し得るものだ」と云ふことを證明して居るのではなからうか。して見れば私達日本人には釋尊が心配された程でなく、比較的にはあるが、他國人よりも信仰的に恵まれて居ると云へるのである。

此點を考へると私達は本當に幸せである。此阿彌陀經に天地一切の佛が皆な均しく「全人類が承認し得る正しいものだ」との確信を以て證言して居ると說かれて居ることは、よしそれが釋尊の言葉で、諸佛が直接話したことでもないにしても、釋尊に丈夫の確信があつたればこそ、云へた譯で、是程までに苦心して居る其御苦心に報い得る者は獨り選まれた私達丈であることを喜んでよいと思ふ。

何しろ、阿彌陀佛は無量光明の佛である。十方世界に其光明の遍照して居る佛である。何處にも彼處にも照り輝いて居る如來の光明は、十方諸佛の上にも輝いて居る筈である。だからこそ諸佛は阿彌陀佛を稱讚して居られるのであらう。然るに悲しい哉。私達にはそれが判らないのである。イヤ私達と雖も一度信眼が開けば私達を照らして居る彌陀佛の光明を見得られる筈で、私達もまた諸佛の如く阿彌陀佛の不可思議功德を實證してそれを稱讚することも出来る筈である。

其信眼を開かしめる方法は色々あらうとも、一番直接して居るものは念佛より外に無い。それは此阿彌陀經で釋尊が斷言して居られるばかりでなく、私達にだつてそれ位のことは判つてよい筈である。だから理窟は兎に角やつて見るのが一番手取り早い。文句を言つて居るより實行する方が勝である。實行して見もしないですべつたところんだのと云つて居るのは誠に馬鹿氣切つたことである。

信眼さへ開けば天地一切の諸佛の證言を私達の上に實證し實現させることが出来るであらう。即ち眞實は誰にも眞實だからである。六方の諸佛が各々の廣長の舌相を出して三千大千世界を覆うて證言

の数ほどもある澤山の佛達も、各々自分の淨土で、大千世界の人達がどうしても承認しなければならぬ眞實な舌で、證言して居られるのである。だから、人々よ。この阿彌陀佛の不可思議功德を稱讃するところの「一切諸佛所護念經」を信じて貰ひたい（南方、西方、北方、下方、上方も亦た同じである。）

し、若し是が偽りであるならば此舌は直ちにたゞれてしまふであらうとまで云つて居ると説かれて居るのは、一人の正しく知り得た眞實は萬人にも眞實として承認されるものであるからである。佛の三十二相の中の「廣長舌相」とは「眞實語」「慈悲語」を表象したものに外ならない。即ち愛語正語より外には云はない處、其處に完全な人格者の光りが輝く譯でもある。

また此の阿彌陀經にも大體を「恒河沙」と云つて佛名としては三十二しか擧げて居ないが、其名は何れも人格の大きさ、人格の美しさ、人格の光り、或は眞實の把持者、眞實の表現者、無限の自由者王者、名譽者、努力者、不變不動者と云ふやうな意味であり、別けても、光りに關係した名が一番多く凡そ十三ほども擧げられてあるなど大いに人格的意味に於て考へて見る價值があると思ふ。

洵に人格の光りこそは私達の最高なる願望だからである。此中にのみ、無限の壽、無限の相、無限の幢、無限の眞實法があるからである。さればこそ此の「執持名號」法を力説する阿彌陀經をば「一切諸佛所護念經」とも呼ぶのであらう。一切諸佛に護念せられることは古來から五種増上縁の隨一たる「護念増上縁」とも云はれて居るところのものである。

かくの如くして釋尊は私達へ「發願せよ」「信ぜよ」と幾度も幾度も繰返へして居られる。

かくまで云はれてまだ疑ひを持つならば、それは正しく病氣にかゝつて居るに相違ない。そんな病氣は早く癒さないと取返しのかね事になる。

古人も云つて居られる。

「人身受け難し、此身今生に於て度せざれば何れの生に於てか此身を度せんや」と。

ぐづ／＼して居れば日は暮れるのである。だからお互ひにもう少し眞面目になつて道を求めるやう専心したいものである。（つゞく）

編輯後記

◆毎回、絶大な好評を博してゐる本誌の更に一生面を打開するために、編集部を三班に分ち、各々脳漿を絞つて新工夫する事になつた。

◆つまり三組の腕くらべ「編輯コンクール」と云つたわけだ。さてどの組がどんな妙工夫をして優勝するか。今から採点表を片手に片唾を呑んで控へてゐるわけだが、どうか讀者も、どしどし遠慮のない批評や希望を寄せてほしい。

◆この話が出ると佐藤春夫氏も大いに乗氣になられ、六月號には、御自分で進んで「淨土」の編輯をやつて見られるといふ申し入れがあつた。いよいよ面白くなつて來た譯である。(眞野)

◆正月號は豫定よりもずつと多

く刷つたが、舊冬のうちに一冊残らず出てしまつて、あとからの大部数の御申込みに應じられなくて、御迷惑をおかけして何とも恐縮してゐる。今月號も新らしい編輯スタッフの全力を擧げて活躍をした。御覽の通りの充實した出來榮えである。

◆今月號に執筆された諸家のプロフィールを一つ二つ。前田聰瑞氏は京都佛敎專門學校敎授、關西佛敎學界の重鎮淨土敎に關する多數の著書がある。赤松月船氏は詩人として夙に知られてゐる人。

江藤滋英氏は前東山中學校長、中村辨康氏の後を承けて淨土宗敎學部長の重任に就かれた。宗敎史家としても既に定評がある。奥平祥一氏は學德翁研究の權威、

「百姓尊德」「續百姓尊德」の二著がある。挿入の尊德翁肖像は小田

原二宮神社より特に寄贈を受けたもので岡本秋暉筆、翁の風貌を最もよく傳へるものと言はれる。

◆高楠博士の玉稿を頂戴したが残念乍ら締切に間に合はなかつたので次號の光彩を添へることにさせて頂いた(佐藤)。

◆前號所載「農村寺院の聲」の筆者は金澤貞禪氏の誤植につき訂正いたします。

◆岩野喜久代女史執筆の「加吽羅王家の二婦人」は都合で次號に譲りました。

◆近頃めつきり投稿が増加してきました。投稿は返信料付きでも必ずしも保管の責任を負へない場合もあるのです。御承知願ひたい。

◆本會發行の書籍御註文は凡て前金に願ひます。集金郵便、代金引換等はお断り。御送金には安全な振替を御利用下さい。

淨土 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十二年二月二十日印刷納本
昭和十二年三月一日發行

(定價金十錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野 正順
發行人

東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ケ年 金一圓
(送料不要)

右の一ケ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然鑽仰」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六 頁 定價 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう親切丁寧に説かれてある。

讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活 一第一期求道生活——求道の動機、恩誓の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。二第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡山上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活 一入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開業時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

法然上人法語抄

藤井 實應 編
菊半裁版 一四四頁
クロース装函入
定價 卅四錢
送料共

信仰の珠玉！ 浩翰なる上人遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句！
現代日本人の聖典！

近 日 發 賣 !!

手頃なポケット型、装訂も確りしたものですから、仕事の合間、電車、自動車の中で手軽に取出して讀める。心靜かなる時、悩める時、隨時隨所に讀めて心の糧となり生活の指針となる。

敬虔な編者が一字一拜の誠を捧げ、嚴密な校訂を経てなつたもの。配列にも、編輯にも新機軸を開き、活字も九ポイント總ふり假名付であるから誰にも讀める！

勤め人も商人も労働者も、そのポケットに懷中に必ず一本を蓄へて信仰の眞髓に接して正しい生活の確立に資して下さい。

◇ 會 仰 鑽 人 上 然 法 所 行 發 ◇

昭和十年五月廿五日第種三郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十一年二月廿日印刷納本 昭和十一年三月一日發行

淨

土

第二卷 第三號

定價金十錢(送料一錢)